

キリスト告白録第3巻『聖意体现』を読む (1)

「聖意体现」 一 父神霊神、二 聖名讃仰、三 聖国来臨、四 聖意体现

2000年10月22日 (東京 新宿)

奥田 昌道

出会い ルカ伝二章 マタイ伝6章 「主の祈」 実存 一 父神霊神 子たるの霊
「我らの父よ」 二 御名讃仰 聖名のゆえ 終末論 三 聖国来臨 四 聖意体现 祈り

(参考) 「聖意体现」 序 まえがき 一 父神霊神 二 聖名讃仰 三 聖国来臨

● 出会い

この『聖意体现』(キリスト告白録第3巻『聖意体现』2008年8月 曠野の愛社発行、マタイ6・9〜13)の本は今から41年前の1959年に、私が今手にしていますという小冊子のかたちで「曠野の愛社」から出版されました。私が小池辰雄先生にお会いしたその年の暮れです。私は先生にお会いしたのが1959年の11月8日でした。9日に京都大学で講演をしていただいた。「無実実存」(1959年11月9日、マルコ10・17〜22。本文庫所蔵)という題で2時間ばかり、本当に自由奔放なお話でした。それがとてもよくて、大変、感動いたしました。それで、すっかり小池先生に私は魅せられてしまったわけです。それが変な先生でなくてよかったですよ(笑)。私は大体、のめりこむ方ですので、変な先生にのめりこんだら、今はどういう世界に行っているかわからない。ところが、のめりこんだ先生が本当にキリストの僕であつたから、非常にさいわいでした。

私はこの先生に出会つてはじめて、解放されたんです。それまで、私は3年ばかりクリスチャンでありました。ところが、クリスチャンの喜びもつかのま、段々かえって窮屈になってくる。

「あなたはクリスチャンだろ。そしたら、そんなことをしたらいけないではないですか。クリスチャンなら、もつと模範生にならないといけない」

というふうに、何だか、「クリスチャンである」ということが非常に自分の生活を窮屈にしていく。私が通っておりまして教会はスウェーデンの教会で、スウェーデン人の若い女性の宣教師でしたけれども。まあ、何と言いましようか、

「あれは罪です。これは罪です。こんなことはいけません。あんなことはいけません」と、もう日常生活ができなくなってしまう。例えば、

「映画はダメです。映画館には悪魔が一杯おります。ダンスもダメです」



とか。色々な本がある。

「聖書一冊だけを読んでいたら、まちがいありません」

と。こう言うから、それでは生活できないですよ。それから、

「お仏壇。そんなものはつぶしてしまいなさい。それは偶像ですから」

と。一事が万事、そうです。

ところが、ついこないだ、昔の私と同じように未だにその中にいて、

「苦しくて困っています」

というクリスチャンの方にお会いしました。

「私は40年前に解き放たれたのに、あなたは未だにそうですか」

と。お葬式に行くでしょ。

「焼香はしてはいけない、遺影の前に頭を下げるのは偶像であるからいけない」

とか。そういうことを書いた本が一杯あるんです。私は、本当にそうなのかしらと思う。

「いや、外側から見たら、いかにも偶像崇拜をしているように見えるから、それはいけない」

と言う。自分は心の中では、その人が天で安らかに在るようにと、心をこめて主に祈っているのに、

「他の人から見たら、いかにもその対象が、その亡くなられた方を神として拝んでいるように見えるから、それはだめです」

とかね。一事が万事、そういうふうには

「お酒なんかは、とんでもない。お酒の中には悪魔がいます。葡萄酒をイエス様は飲まれたけれども、あれにはアルコールは入っていないかったです」

とかね(笑)。そういうふうには極端になりますと、本当に生活が苦しい。

そういう縛りから解き放ってくださいったのが、私にとっては小池先生だったんです。先生にすっかり魅せられてしまった。そしてたまたま、

「クリスマスに遊びに来ませんか。東京にいらつしやいませんか」

と、ご案内をいただいたので、馳せ参じた。その時にいただいたのが、この本なんです。そういう思い出があります。この『聖意体现』の本は、京都大学で聴いたお話と、それからこのご著書と、この二つは私にとっては導きの星でした。そういう意味で、この本は非常に思い出も深いし、何度も繰り返し読みました。

●無教会陣営との戦い

ただ、今にして思いますと、中身が少々むずかしい。その頃は夢中になって読んでいたけれども、正直申しまして、中身がむずかしい点があります。一番引つかかる言葉は、「実存」という言葉です。それから、「終末」ということ。この「実存」と「終末」という言葉が一



つの鍵になっています。それについては、先生はわざわざ註(巻末)をつけて、「私はどういう意味で、どういうつもりで、実存という言葉を使っているか、終末という言葉を使っているか」

ということを解説しておられるけれども、それを読んだだけでは、なおわかりづらいところがあります。私は哲学者ではありませんので、哲学の勉強もしていないズブの素人ですが、私の以来40年の生活の中で、

「二体、実存というのはどういうことか。終末というのはどういうことなのか」ということをずっと考えておりました。それで、きつとこうなのではないだろうかということをお願いしたいと思います。

当時は戦後すぐで、非常に実存哲学が頭をもたげて来ていた。サルトルとか、ハイデッガーとか、そういう哲学者もいましたし、「実存」という言葉を非常に愛用する時代であったと思います。今はあまり、実存という言葉は使わないと思いますが、そんな時代背景もあるということです。

それから、この本を書かれた頃の先生は無教会陣営を相手にして、壮絶なる戦いをしておられた。何の戦いかというと、先生は「聖霊」によって突破されたんです。従来の無教会信仰から突き抜けられた。その突き抜けたことが、無教会陣営から見たら異端と映った。それで、先生は

「新約聖書のこの時代が今もなお同質的に、質的には同じ次元で我々に迫っている。それを受けとらないということは、神さまの恵みを拒んでいることになる。早く、目覚めてほしい」

という思いで書かれたら、ますます火に油を注ぐように攻撃を受ける。小池先生は藤井武先生のお弟子さんでした。

「小池はおかしい。藤井先生とは別なすがたに変わってしまった。異端だ」

と言われて、さんざん叩かれる。それに対して、先生はやむを得ず応戦する。『曠野の愛』誌に書かれているのは全部そういうものです。『曠野の愛』の後ろに「武蔵野だより」というのがありますが、そこに、どんな攻撃を受けたかということがちゃんと書かれています。

「高名な学者が、無がけしからんと仰る。仏教とキリスト教をごちゃまぜにするものでけしからん」

とか。そういう攻撃が来るわけです。あるいは

「小池は無になりきったようなことを言うけれども、とんでもない傲慢なやつだ」
とか。先生は

「いや、私は無になれないから、キリストの無をいただくんだ。無者になれない自分、キリストがご自身の中の無を恵みとして上げると言われたら、もうありがたいくて、ありがたいでしょうがない。平伏してそれをいただくんだ」



と。そういうことを「武蔵野だより」の中で弁明しておられる。

「言葉の端々^{はし}をとらえないで、本当に私が言いたいこと、訴^{うった}えたいことを本当に受けとってほしい」

ということを先生は懇願するように弁明なさるけれども、それが受け入れられない。そういう戦いの中で、この本も書かれている。

「証言をするときに、歴史の中では或る部分を強調することがある」

ということを書いておられる。それは正にそういう時代背景の中で、聖霊ということ強調されたわけです。

「しかしどんなに聖霊を強調しても、私は十字架ということを絶対に離しえない。

十字架が土台に在つてはじめて聖霊がやってくるので、十字架抜きのための霊、

諸霊があります、いろんな霊が本当にうようよしてますよ。そういう、

キリストの十字架抜きにやってくるような霊、それは私とは何の関わりもない。

福音とは何の関わりもない。そのことをハッキリ申し上げておきたい」

ということも、ここに書かれております。そういうバックグラウンドの中で書かれておりますから、少々むずかしかったり、難しい言葉が使われていまして、相手は学者どもですから、そういう者を意識しますと、こういうふうな表現にならざるを得ない。

先生自身も、1959年といいますと、年齢にして55歳。現実^{現実}にこれをお書きになったのは、それからさらに5年ほど前の1954年頃に、50歳ぐらいのときにお書きなっているわけです。皆さん、50歳の方は、

「へえー、私の歳でこんな凄いのを書いていたの!？」

と、びつくりされるかも知りませんが。そういうふうなことなんです。

●ルカ伝11章

前置きはそのくらいにいたしまして、まず、福音書を開いていただきました。ひとつはルカ伝、それからもうひとつはマタイ伝の、「主の祈」の出てくるところです。ルカ伝では、11章のところ。

「イエス^{あるところ}或^{あるところ}処にて祈り居給いしが、その終りしとき、弟子の一人いう『主よ、ヨ

ハネの其の弟子に教えし如く、祈ることを我らに教え給え』

「ヨハネ」というのは、バプテスマのヨハネです。イエスさまの先に来て、道を備えたひとです。イエスさまはヨハネから洗礼を受けておられる。ヨハネは、

「いやいや、とんでもない。私こそあなたから洗礼を受けるべきであるのに、私な

んか洗礼を授ける資格はともありません」

と拒んだけれども、

「いや、今は受けさせてほしい」



と言われた。イエスさまは、洗礼を受ける必要なんかないお方であるのにもかかわらず、ご自分をなにか特別なものとは絶対に思っておられない。「私も受けたい」と言ってお受けになった。そのとき、

「天が開けて、聖霊が鳩のように降った」

という言葉がでています。

そのヨハネが自分の弟子たちに祈のことを教えていた。そこで、イエスの弟子たちが、

「ヨハネが教えているのですから、先生、私たちにも直々に、どう祈ったらいいのか、祈のことを教えてください」

と言ったのが、このルカ伝です。

ルカ伝に出てくる主の祈はごく簡単なんです。マタイ伝の方は非常に整った祈になっていますが、ここに出てくるのは、

「御名の崇められん事を」

「御国の来らん事を」

「我らの日用の糧を日毎に与え給え」

この「日毎に」というのが大事なんです。それから、

「我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免したまえ」

「負債」というのは要するに、傷つけた者、悪口を言った者、いじめた者。そういった何らかの意味で謝らなければならない立場のひとつです。

「そういう者を私はゆるしますから、今度は、神さま、私の負債を——あなたに対する負債、人に対する負債を——それをおゆるしくください」

ということです。それから、

「我らを嘗試にあわせ給うな」

ということ。これだけがルカ伝なんです。非常にソフトです。そして、

5 また言い給う『なんじらの中たれか友あらんに、夜半にその許に往きて「友よ、我に三つのパンを貸せ。6 わが友、旅より来りしに、之に供すべき物なし」と言う時、7 かれ内より答えて「われを煩わすな、戸ははや閉じ、子らは我と共に臥所にあり、起ちて与え難し」という事ありとも、8 われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて与えねど、求の切なるにより、起きて其の要する程のものを与えん。

夜中に友だちがやって来て、「パンを貸してくれ」と。「いやいや、もう寝ているので、面倒臭いからいやよ」と。友だちだからといって、わざわざ起き上がってきてくれないけれども、「頼むから、頼むから」としきりに願えば、根負けして願いを聞いてくれるだろう。まして神さまはと、こういうお話です。

9 われ汝らに告ぐ、求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を



叩け、さらば開かれん。¹⁰すべて求むる者は得、尋ぬる者は見出し、門を叩く者は開かるるなり。¹¹汝等のうち父たる者、たれか其の子、魚を求めんに、魚の代りに蛇を与え、¹²卵を求めんに蠍おそりを与えんや。¹³さらば汝ら悪あしき者ながら、善き賜物たまものをその子らに与うるを知る。まして天の父は求むる者に聖霊を賜わざらんや」
(ルカ11・1～13)

あなた方は悪い者であつても、自分の子供にはいいことをしてやるではないか。

「まして天の父は求むる者に聖霊を賜わざらんや」

と。「聖霊」は最も素晴らしい賜物、贈物おくりものだということがこのルカ伝に出ています。

●マタイ伝6章

それから今度は、マタイ伝の方へいきますと、マタイ伝ではいわゆる「山上の垂訓」と言われている——小池先生は「山上の大告白」と言っておられる——その中に出てきます。6章5節からです。

「⁵なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕あらわさんとて、会堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報むくいを得たり。人前で見せびらかすような祈はするなと。むしろ、隠れたところで、隠れたことを見ていらつしやる神さまの前に祈りなさいと。それが

「自分の部屋に入つて、戸を閉じて」ということです。

⁶なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在います汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。

祈は人前でするものではない。自分と神さまとの一对一の関係です。見せびらかすものではない。本来、一対一です。しかも、心と心です。言葉に出すことすら要らない。自然な言葉に出てくれればいいけれども、別に言葉に出てこなくても、心の中で

「主さま、イエスさま、……」

と、それでいいんです。そういうふう祈りなさい。それは電車の中でもどこだっていい。場所は問わない。形もいらない。真心こめて、

「霊とまごをもつて拝せよ」

と言われたように。祈るなら本気で真剣に、「お願いします」と祈る。さつき、ルカ伝で、「友だちだからといって聞いてくれなくても、本当に一生懸命にやれば、友だちでなくても聞いてくれるよ」

と、そういう言葉がありました。では、真剣に熱心ということと、長時間、グタグタ、グタグタ祈るのかというと、そうではない。

⁷また祈るとき、異邦人のごとく徒いたずらに言を反復くりかえすな。彼らは言多きによりて聴



かれんと思うなり。

無駄な言葉を長々と繰り返すことはいらぬ。量が多ければ聞かれると、あの人たちは思っているけれども、そうではないと。

8 さらば彼らに倣うな、汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要な物を知りたもう。

これが大事なんです。親鸞が言ってます。

「念仏を称えようという思いが起る時、それはもう弥陀の御もようしである。我々のような悪人に念仏を称えよう、仏様にお祈りしようという、そんな殊勝な心が起るはずがない。それが起こつてくるということは、もう弥陀の御もようしが、迫りがあつて、それに促されて南無阿弥陀仏と祈る。だから、手を合わせて南無阿弥陀仏と祈る時は、それはもう弥陀の本願がかかっているんだ」

ということを言っている。イエスさまの場合も全く同じです。祈る前から、我々が何を求めているかということをやんと、主さまはご存知なんです。ご存知でいて、むしろ、我々に祈らせよう祈らせようと働きかけてくださっている。それで、殊勝にも手を合わせて、「主イエスさま……」と、こうやつて祈るんだから、その時は主さまとあなたは一つなんだよと。だから、くどくど祈る必要は何もない。ただ一発でいいと(笑)。小池先生は、

「主さま、アーメン！」

と、これで終りだと言われた。それがここで言われていることです。

「くどくどと祈る必要はない。必要なことは全部ご存知なんだよ。だから、次のように祈りなさい」

と言われたのがこのマタイ伝の祈なんです。

9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。」

10 御国の来らんことを。御意の天のごとく、地にも行われん事を。

11 我らの日用の糧を今日もあたえ給え。

12 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。

13 我らを嘗試に遇せず、悪より救い出したまえ」(マタイ6・5-13)

ルカ伝の方が少しくだけた祈であるのに対して、こちらの方は少し整っています。それから、ルカ伝になかった言葉が加わっています。それは何かというと、まず、

「天にいます我らの父よ」

という呼びかけが一つ加わっている。それから、

「御名の崇められん事を」

「御国の来らんことを」

というのはルカ伝と一緒にです。ところが、その次の真ん中にひとつ立っているものがある。



これが極めて大事なんです。

「御意の天のごとく、地にも行われん事を」

ということ。御意が天において成っているように、そのように地においても御意が成りますように。それを小池先生は更に、

「私を通して御意を成させてください」

と、そういうふうを受けとられた。そこが最も大事なことです。これが「聖意体现」という言葉で表現されていることなんです。マタイ伝で最も大事な柱、大黒柱、これが実はルカ伝でははずされています。どういう主旨ではずされているのかはわかりませんが、マタイ伝ではそれが大黒柱になっています。それから、

「我らの日用の糧を今日もあたえ給え」

これは一緒ですね。「日毎に与え給え」というのは「今日も与えたまえ」となっている。それから、ルカ伝では、

「我らに負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免したまえ」

「ゆるしますから」と、これからなんです、マタイ伝では、

「我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え」

「ゆるしましたから」になっている。これは大変なんです。

「私はまだゆるしができていない。これは祈れない。いつまでたつても、『ゆるしました』と言い切れない。これから『ゆるすように努力しますから』だったらいいんだけど、『ゆるしましたから』と断言するのは大変だ」

と。どうしたらいいんですか。

「助けてください。私はとてもゆるせません。ゆるせる人間にしてください」

と。いつも、困ったら、「助けてください」なんです。互角に勝負しようなんて思ったら、まちがいです。「愛しなさい」と言われたつて、愛がないから神さまに愛をいただくんでしょ。愛がないのに、「愛しなさい」と言われているから愛しよう愛しよう無理したら、それはもう大変です。苦しくなる。「愛しなさい」と言われたら、

「私は愛がないんです。あなたは愛そのものです。あなたの愛をください。そうし

たら、『愛しなさい』というお言葉を実行できますから」

と。全部、向こうにゲタをあずけるんです。それがコツですから。自分の力で何かをやるうと思つたら、これはもう大変です。向こうから流れてくるものに乗っかって、そして行く。エスカレーター式なんです。小池先生は言われたでしょ、イエスさまは

「何も自分でできない。私は何も教えることもできない」

と言われたと。何もできないと言われる方があらゆることがおできになった。それは全部、神さまが力をくださって、そして、

「これを今しなさい。今はこうだ」



と仰るままになさっていた。仰るままになされるという、その一体感はどこから来ているか。それは祈だよと。イエスさまはどんなひとか。祈の人だ。祈とは何か。「お父さま」と呼ばれたその方^{かた}といつも一緒に、一つであることなんです。赤ちゃんがお母さんに抱かれているような姿で、抱かれてある姿でお話をしている姿が祈のすがたです。

だから、イエスさまが神さまと呼ばれるときに、「神さま」と呼ばれない。自然に、

「父よ！」

と呼ばれた。我々だったら、「お母ちゃん！」と呼びますね。実はあんまり、「父よ」と私は呼びたくないんです(笑)。男は父親とはどうしても敵対関係にありますので、なかなか「父よ」なんて、よっぽどにならないと叫べないように私は思う。「お母ちゃん」です。案外、娘は「父よ」と呼んでくれるかも知れないけれども。

どっちでもいいです。とにかく、イエスさまは「父よ」と呼ばれた。「子供」ということを自覚しておられた。だから、まず自覚は「父よ」ということ。

それからもうひとつの自覚は「主^{しゅ}よ」ということ。神さまに向かって

「主よ！」

と呼ばれた。「主」と呼ぶときには、自分は「僕^{しもべ}」という自覚です。僕というのは、主の仰ることに、

「はいっ、何でも仰る通りに」

と従う。

「私に都合がいいからお受けしましょう。都合が悪いからお断りしましょう」

なんて、これは一対一の対等の関係なんです。これを今、我々の人間関係では「自由」と言っています。

「あなたは自由ですよ。良かったらお受けなさい。嫌だったら断りなさい。自由ですよ」

と。これは一対一です。相手は神さまですから、もう命をあずけたんでしょ。そしたら、「主と僕」の関係です。

「はいっ」

と、これだけなんです。自分で判断しなくていい。楽なんです。言われる通りすれば、すべてはうまくいく。というか、一番いいようになる。イエスはそれをなさっていた。

「父よ、なんじの御意を、我を通して成さしめたまえ」

と。これが投げ出していらつしやる祈だったんです。

そういうことで、「父よ」という呼びかけと、それから、真ん中にありました、

「御意が天に行われているように、地にも行われますように」

という、この二つが入り、そして、さっきの

「ゆるしましたから、私もゆるしてください」



と。そして、

「我らを嘗試こころみに遇わず、悪より救い出したまえ」

と。こんな内容の祈になっています。

●「主の祈」

そこで、今度は小池先生の本の方へ行きましょう。まず、13頁を開いていただきます。終りから5行目のところに、

《しかも今日ほど「主の祈」が心底から祈られねば危ない時期ときはない。全世界は今もな

お「主の祈」をルッターの言った通り、「十字架につけて」いる。》

「主の祈を十字架につけている」というのは、どういうことかと言いますと、

「他人ごと」に思っている、本当に自分の祈にしていない
ということです。

「主の祈」とは面白い言葉ですね。これには二つの意味があると思うんです。主ご自身が祈っていらつしやる祈。主イエス・キリストが父なる神の前に祈っておられた祈ということ。主が主体となつて祈っておられた祈という、そういう意味があると思います。普通は、「主の祈」というのは、主が我々に「かく祈れ」と教えてくださった祈で、祈る主体は我々なんです。

「あなた方はかく祈れ」

と書いてありますから。主が教えられた祈。そういうふうに普通は受けとつています。主が教えてくださった祈です。祈るのは誰かという、あなた方一人ひとりだと。でも、私は、主さまが神さまに、「父よ」と言つて祈っていらつしやる、そのご自分が祈っておられるその姿をそのまま私たちに、

「あなた方もそうありなさい」

と。イエスさまという方は、「私は別格。お前たちはこう。私は先生、お前たちは弟子」と、こういうように分けておられない。もちろん、我々に対して

「お前たちは弟子だよ」

とか言われました。でも、イエスさまの基本的な根本的な姿というのは、小池先生が非常に素晴らしく捕まえられたことですが、あの「山上の垂訓」ですら教えを垂たれているのではない。垂訓きんではない。大告白たいくはんだと。ご自分のうちなる姿をそのまま表しておられる。

「恵福きふくなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

というのは、「お前たち、そういう姿になれよ」という説教ではない。

「私は本当に神さまの前に霊はからつぽだ。何もない。からつぽになつてみたら、神さまという天国が流れ込んできて、天国になつてしまった。こんなうれしいことがあろうか」



と。それを言ってらっしゃる。すべてそうなんです。イエスさまの言葉というのは全部、ご自分の中に起こっていることを、そのまま流しておられる。

「お前たちもその姿にいてほしいね。一緒の姿になったら、同じしあわせになれる。同じ姿になれるよ」

と。そういうふうに、まずご自分が体験なさっていること、今生きておられる姿、それを私たちにオープンにして、そして、

「あなた方と私たちと一緒に生きようね。運命共同体じゃないの。父と子じゃないの」

というふう呼びかけてくださる。だから、この主の祈りもまずは主が祈っておられる。ルカ伝にありました。主が祈っておられた時に弟子たちがそこへ近づいて行って、

「主よ、祈を教えてください」

と。だから、主が祈っておられたそのところで、

「こう祈るんだよ」

と言われたのがルカ伝です。ですから、そのように、「主の祈」というのは主ご自身が祈ってくださっている祈。そして、私たちもその祈に乗っけていただく。その中に入らせていただく。

「一つになつて祈るんだよ」

と。そういうことだと私は思う。

「主の祈が十字架につけられている」というのはどういうことかというのと、何かよそゆきにされて、神棚に祭り上げられてお題目になって、全然、自分の生活とは関わりがないようなことになってしまっている。礼拝の後に、「さあ、主の祈を祈りましょう」と——ドイツでは「ファーター・ウンザー」(我々の父よ)と言います——そして、お題目のように、「ムニヤムニヤ、ムニヤムニヤ」と言つて、「アーメン」と言つて終り。

「あ、これで今日の礼拝は終わりました。さあ、今日はピクニックに行こうかな」

なんていうような調子で、何だかその礼拝の最後のしめくくりでお題目になって、全然、自分の生活、実生活と関わりをもつてないような姿のことを、ここで

「主の祈が十字架にかけられている」

と言っている。少なくとも、他人ごとだと思っている。

「みくに御国を来きたらせてください」

というのは、

「私は知りませんよ。神さま、あなたは何でもできるんですよ。やってくださいね。

私は見てますから」

と、こういうことではダメだ。自分を投げ出して行きなさいということなんです。

「どうぞ私というこの存在を通して、あなたの御意を成就してください」



と。一人ひとりがみんなそうやって、キリストの姿になったら、ここは変わってしまう。ところが、いまだに主イエス・キリストにだけ働かせておいて、他の人間がこうやって傍観していて、

「御意が成りますように」

なんて、そんなんじゃないよということです。それが、先生が、この祈のことを我等の

「実存の源なる主の祈」

という副題をお付けになったゆえなんです。

●実存

ここで、「実存」というむずかしい言葉が出てきました。「実存」というのは、さつきも申しましたように私は哲学者ではありませんので、おおざっぱに私の感ずるところを申しますと、実存という言葉は単なる「存在」というものではないものを表そうとしている。存在というのは、そこに転がっているもの——石ころがころがっている、花が咲いている、鳥が飛んでいる、人間がそこに横たわっている——そういうふうに、自然にそこに置かれてあるという、そういう状況、状態、自然なさまをさしていると思う。ところが、人間というのはすべて、何か目的をもち、何かに意志し——それが善であるか悪であるかはとにかく——理性的な、意志的な存在で、何か「かく在りたい」ということで、たえず行動的です。「存在」というのは単に客観的にそこに在るということで、客観的にそこに横たわっている。そして、動いていない。静的なんです。

それに対して、「実存」と先生が仰るときには、それは主観的というか、主体的というか、意志的な存在です。単なる存在ではなくて、主体的、意志的に何かをしようというふうに、たえず動的な存在です。こういう気持ちを込めておられるんだと思う。それを「実存」という。正に人間というのは、気づくと気づかざるとにかかわらず、そういう存在だということですよ。草木だって、私は何か意志しているように思いますけれども、ヨーロッパ人から見たら、草木なんていう自然のものは意志をもたず、本能にだけ従って動いているに過ぎない。それに対して、人間というのは意志する存在だという、そういう面を強くだしているのが、「実存」という言葉ではないだろうかと思う。

人間存在というものを、そのように何か意志的な存在として考えたときに、その意志的な存在の人間がどちらに向かって生きようとしているのか。ある人は芸術の中に自分の生きがい、人生の目的を感じます。ある人は経済的な活動や金儲けに。ある人は学問の方にのめりこむ。道徳的に生きようとか。いろんなものがあります。

それでは、我々はどうなのか。我々のその源に、根底にあるべきものは、我々の源にあるのは実はこの「主の祈」なんです。これから解説しようとしているこの「主の祈」です。これを本当に受けとったときに、我々の人間存在の——もう「人間存在」と言っておきましょ



う、「実存」なんていうむずかしい言葉を使わずに——人間存在の根底にこの「主の祈」をもってきたときに、その人の生き方が輝いてくる。今までとは違う生き方になってくる。しかも、それは神さまが喜んでくださる生き方になる。

そこからはずれた生き方は、どんなに自分で一生懸命でやっているようでも、神さまの目から見たらクエスチョンマーク(?)だ。自分もやがてこの世を去るときに、

「ああ、これで本当によかったのかしら、価値ある生き方だったのかしら？」
というふうに、悩むようなことになるよと。

ところが、どんなに惨めに見えても、本当にこの「主の祈」を生きぬいた生きざまというのは、どこで仆れようと、どんなに惨めなように外から見えようと、それは素晴らしく輝く生き方なんだということです。

「それは主さまが担保してくださっている、保証してくださっている。だから、その中に生きようよ。それは一握りの人でなくて、一人ひとりが魂をもっている存在なら、神さまによってつくられた魂ある存在ならば、みんな、この主の祈というものが日常生活の根底に流れ、脈打っていないといけない。脈打っていたら、素晴らしいことになるよ」

という呼びかけなんです。それで、私はこれは素晴らしいと申し上げるわけです。

《しかも今日ほど「主の祈」が心底から祈られねば危ない時期はない。全世界は今もお「主の祈」をルッターの言った通り、「十字架につけて」いる。各民族が、そして我ら各個人が、これを新たにおのが祈として、悔い改めぬ限り、神の審判はその深刻さを増してゆくであろう。しかし、これが真にわが腸の祈となるとき、神はそれらの魂を用いて聖意を体现せしめ、

これを本当に祈ろうとする人を神さまはもちいて、そして、御意をその人を通してならしめてくださる。

世の光、地の塩、愛の泉たらしめ給うであらう。二十世紀後半の危機が、「主の祈」を、実存せんとする神の民によって突破され、になわれんことを！ げに「主の祈」こそは実存の源である。

そして、ギリシア語原典からの訳がここにあがっています。

マタイ福音書 6・9～13 (私訳)

- 一 9 天に在ます私たちの父様！
- 二 10 あなたのみ名が、聖としてあがめられますように。
- 三 11 あなたのみ国が、来ますように。
- 四 12 あなたの心意が、成し遂げられますように、天においてのうちに、地においても。
- 五 13 私たちの日用の糧を、今日も私たちに、お与え下さい。
- 六 14 私たちの負債を、私たちに対してお赦し下さい、私たちに負債ある者たちを、私



たちが赦しましたように。

七 ¹³ 私たちを試惑につり込まないで下さい。私たちを悪しき者から救い出して下さい。

(附) み国と能力と栄光とは、永遠にあなたのものでありますから。アーメン。

そして、この祈を八つの項目に分けられた。それが15頁にできます。

- 一 父神霊神
 - 二 聖名讃仰
 - 三 聖国来臨
 - 四 聖意体現
 - 五 今日一生
 - 六 贖罪赦免
 - 七 神護救済
- 附 頌栄讃美 》

私は小池先生に出会ったときに、先生は黒板に字を書かれるでしょ。

「なんと、この先生は漢字をうまいこと使う先生だな」

と思った。言葉を非常にリズムミカルにお使いになる。これも全部、四つの漢字で統一してありますね。漢詩をつくられるような、そういう素養のあるお方だなと思いました。

● 一 父神霊神

次に、16頁の「一 父神霊神」のところにいきます。これはまた極めて大事なことです。「父神霊神」というふうに捉えてくださったことは、私にとって非常に印象深い。神は「父なる神」であると同時に「霊なる神」である。この二つが大事です。

「父なる神」というのは、ここに「父と子」と書きましたが、我々の人間関係で父というのは一番近い関係です。あるいは、母と子。抱き抱かれるという、いわば、なれ親しむ関係です。お父さんと抱きついて、抱いていただいて、そして、その姿を我々は像に刻むこともできます。絵に書くこともできます。そういう、一面でなれ親しむという感覚があるところが、なれ親しむのがずっといきますと、それを絵に描いたり像に刻んだりして、ヘタしますと、見える姿にとらわれる面がある。

ところが実は、「父なる神」は同時に、「霊なる神」である。霊なる神というのは本来、目に見えない。手でつかむこともできない。単なる霊なる神だったら、とりとめもなく困ってしまう。ところが実は、父なる神であるという。父という非常に親しい肉親のような間柄でありながら、実はその方の本質は霊なる神であって、我々の存在を超えておられる。こちらからは捕まえられない。向こうから、「〇〇よ」と言つて、名前を呼んで捕まえてくださる。向こうは捕まえてくださることがあっても、こちらから向こうを捕まえることはできない。そういう存在なんです。だから、預言者なんかも絶対、自分の方から神さまを



捕まえたなんて誰も言っていない。ある時、みな名前を呼ばれた。

「イザヤよ!」「エレミヤよ!」「モーゼよ!」

と名前を呼ばれて、

「はいっ、あなたはどなたですか」

と答えたわけです。モーゼなんかは、柴が燃えていたので、近づいてみたら、燃えていても全然燃え尽きない。不思議なことだと思っていたら、御声があつて、

「ここは聖なる場所であるから、お前の靴を脱ぎなさい」

と、モーゼは言われた。

「はいっ」

「私は在りて在るもの——在りて在らしむるもの——お前の同胞がエジプトで苦しんでいる。お前を捕まえて、エジプトの苦しみから解き放つから、お前は行け!」

「とんでもありません」

「いや、行け!」

というように向こうから迫ってくるんです。迫られて、始めは問答していますけれども、

「はいっ、わかりました。もう参ります」

と言つて行くんです。イザヤだつてそうです。火で唇を焼かれる異象を見ます。そして、

「お前は行け!」

「いえ、私は罪なる人間で、そんなことはとてもとても、神さまのご用には役立つ

者ではありません」

と。モーゼの場合も、

「私は口下手^{べた}でとても人の前でものを言えないんです」

と、さんざん自分の方を言っているんです。ところが、神さまは

「私が選んだ。命令だ、行け!」

と。単なる、「命令だ、行け」だったら、それは「タイラント」(tyrant)と言ひまして、暴君、専制君主ですね。

ところが実は、「父よ」と親しく呼ぶ。「父よ」と言うときには、何を表しているかという、これは愛なんです。「父」というなかで一番表されているのは愛です。父は愛の存在なんです。父の懷に抱かれていた独子^{ひとりご}なるキリスト。だから、「母」と言つたつて構わないと思いますよ。そういう愛の方^{かた}に対して自分を「子」として自覚する。同時に、そのお方は「霊」なる神であつて、そして「主」なる神であつて、自分は「僕」として自覚する。これが一つになつているのがキリストの姿なんです。このことが、この「父神霊神」という、ここに出てきます。

《主イエスは「目をあげ、天を仰いで」祈りはじめられた。それは、いよいよ御自身が十字架にかけられ、父の「栄光」を現すべき時が近づいたときであつた。このことはヨハネ伝第17章の冒頭に書いてある。いのりに特別の形式はいらない。



先程も申し上げました。祈に特別の形式はいらない。祈は祈られるものである。愛の迫りを受けて、主さまの霊の迫りを受けて——といっても、自分たちには確信がないけれども——祈ろうと思うときに、それはもう主さまの方からの促しだ^{うなが}ということ。主は扉を叩いておられるから、祈ろうという気持ちになる。だから、祈に特別な形式はいらない。

しかし我らの魂が神にむかって朝顔のように開け放たれていることは、神のよろこび給うところであらう。

この言葉は私は好きでした。祈に特別の形式はいらない。だけど、祈るとき、魂が朝顔のようにパーッと開いて天に向かっている。この姿が神さまの喜んでくださる姿である。そうすると、うなだれて下を向いているような祈はできなくなります。下を向いていたなら、朝顔がしおれている姿だと思います。やはり、朝顔というのは絶えず太陽に向かって開いている。天に向かっている。本当に元気のいい朝顔というのは、パーッとラッパのように花を開かせて上に向かっています。そういう姿で祈ろうよと。

イエスさまはおそらく、ご自分で祈っておられるとき、天を仰いで両手を広げて祈っておられたと思います。そういうことがきつとある。先生もよく両手を広げて天を仰いで祈られた。特に海岸に行つて、波しぶきの打ち寄せる岩の上なんか立って祈られるときは、天を仰いで祈られた。やはり、我々は父なる神、霊なる神というときに、地面の中にいらつしやるとは思わない。なにか、天を仰ぐわけです。空間、天、それを思いながら、見えないう神さまに向かつて、

「主さま！ イエスさま！」

と祈るわけです。やはり、天を仰いで祈る祈はいい。下を向いてうなだれていたなら、胸が苦しくなりますよ(笑)。こうやって両手を開放して、「主さま！」と祈るわけですね。そういう祈をここで書いてくださっているんです。

●子たるの霊

《我らの魂が神にむかって朝顔のように開け放たれていることは、神のよろこび給うところであらう。イエスはまた「父よ、時来れり、……」とつづけておられる。そして、この訣別に際しての祈の中で、「父よ」を六回叫んでおられる。実際はもっと多かったであらう。そのようにイエスは、神を父なる神、父神として、深く把握し信頼し拝し、かつ父と一つになっておられた。子たるの霊に在って。》

「子たるの霊」、これがまた大事なんです。父なる神が霊なる神であるならば、我々拝する者も「子たるの霊」をいただいていないと祈れない。向こうは霊だ。こっちは何だ。単なる物体では困ります。単なる心でも困る。本当は、子たるの霊です。これを頂いているときに、この霊と霊とが呼び合い、響き合うわけです。

ヨハネ伝の中にありましたね、



「あの山でもこの山でもない。父を拝するときが来る。父なる神は霊と真をもつてする礼拝を喜んでおられる」

と。霊と真をもつて拝する礼拝。形は要らない。場所もいらぬ。ただ、

「霊と真をもつて」

と。ところが、この「霊と真」と言われましても——創世記を見ますと、我々の中に昔神さまは息を、霊を吹き込んでくださったけれども——知らないまに、その霊がどこかへ行ってしまった。だから、もう一回、来ていただかないといけないわけです。それが聖霊ということになる。聖霊のバプテスマということです。

「聖霊を賜わらざらんや」

とありましたでしょ。だから、「子たるの霊」にあつて「父よ、霊なる神よ」と呼べるのは、この霊を頂かないと呼べない。普通の人間は直接には呼べないんです。では、どうしたらいいのだろうか。

だから、イエスさまは来てくださったって、十字架にお架かりくださったって、我々の罪を全部片づけて真っ白にしてくださいって、そして聖霊をくださる。その頂いた聖霊は父に向かって、

「アバ、父よ！」

と呼びかける。

「主さまー！」

と、恐れなく親しく呼びかける霊です。恐れをいだかせる霊ではない。それまで、私たちがもっていました霊は恐れをいだかせる霊かも知れません。

「神さまは恐いよ、お前を罰するんだよ、お前は悪いことをしただろ」

なんて言つて、罰する審きの神です。ところが、キリストはその前に敢然と立つて、

「彼らの審きは私が全部引き受けます。彼らの罪は全部私が引き受けます。私が十字架であのように残酷な死をいただきました。彼らを赦してやってください。彼

らのために私は命を棄てます」

と祈つてくださった。そして、見事にそれを果たしてくださいました。だから、イエスさまの背後にいる私たちは全部、無罪放免です。イエスさまの十字架がなければ、私たちは真っ黒かもしれません。でも、イエスさまが十字架で勝ってくださいましたから、私たちは真っ白なんです。そして、そのことを、

「本当にありがとうございます」

と言つて受けとつておれば、そこに霊は流れてくる。聖霊が流れてくる。それが「子たるの霊」です。その「子たるの霊」をいただいているときに、「父よ」と呼べる。

イエスさまは生まれながらにそれがおできになった。そこがちよつと我々と違うところ。他の点では、非常に情け深い方だし、情にもろい方だし、本当に人間らしいお方ですけれども、我々とどこが違うかという、生れながらにして、この「子たるの霊」を



いただいて生まれて来られた。そして、もの心ついたときからもう祈っておられた。三十歳になって伝道を始められたときに、あのヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けたときに、天が裂けてもう一度、聖霊が流れ込んできました。もともと、子たるの霊をもっておられた方に、だめおしのごとくに、聖霊が鳩の如く、滝の如くに流れてきた。それから、あの曠野に導かれて、そこでサタンと戦われました。徹底的に僕の姿で戦われた。

「私ではありません。あなたです。あなたの御言です。わが思いではありません」

ということを徹底的に学ばれたのが、あの四十日四十夜の曠野の闘い^{たたか}です。そこでサタンは負けた。それで、キリストは伝道に立たれたんです。

「天国は近づいた」

と。「天国は近づいた」とは

「私の中の天国はお前たちのものだ。それを上げるんだよ」

と言って来られたんです。だから、私たちは

「はいっ」

と言うしかなかった。

だからもう何もかもおんぶにだっこです。本当に何もかも主がなさってくださいました。本当に何もかも主になさってもらわないと、我々はどうにも救いがたい人間だということを旧約聖書は示している。ユダヤ民族という一つの民族を通して、人間がどんなに救われがたき——「項強^{うなじこわ}き民」とあります——強情で、ひねくれて、どうにもならん存在かということが、このユダヤの歴史で示された。そして、イエスさまという救い主が現れた。

我々はユダヤ人ではありませんから、ユダヤの歴史をたどったって、ピンとこないところがある。けれども、我々だってやつぱり、民族の歴史を見、自分自身の歴史を見るとときに、そんなに褒めたものではありません。みんな五十歩百歩です。比較的、大和民族は穏やかだと先生も仰るし、激しい戦いをしていない。そういう点はあるでしょうけれども、やはり、人間の中に巣くっているエゴ、自己中心、それはもう消えがたいものがあります。それでみんな苦しんで来たんですから。その苦しんで来たものに対しての解放が十字架ということです。

「十字架という事実でもってもう済んだよ」

と。「いや、済んだような気がしません」と言っても、それは気がしないだけであって、「済んだよ」という事実は動かないんです。これほど凄い事実はない。十字架という事実は、これはもう全世界がどんなことになるうと、天と地の間に十字架は燦然^{さんぜん}と今輝いているんです。私にとつての十字架は決して血生臭いものではありません。勝利された今は輝いている。

ちょうど、オリンピックで激しい戦いをしたあとに、表彰式でにこやかに一番まんなか



ている。メダルなんかなくなつて、それ自体が輝いている。そして、勝利の宣言なんです。「罪は滅ぼされた。サタンは負けた。私の十字架の中にお前はいるならば、お前は勝利だ。私の勝利をお前に上げる。私の生命をお前に上げる。そのために私は戦つた。そして勝つた。さあ、喜べ！」

と。これが十字架なんです。そして、「はいっ」

と言つて、喜んで受けとつていると、子たるの霊が流れてくる。そしたら、主の祈が祈れる。本気で祈れるんです。身近なものとして祈れる。そこへ来るまでは、お題目になつてしまう。そういうことをここで先生は訴えたかったんですね。だから、

「子たるの霊にあつて」

ということが大事なわけです。

●「我らの父よ」

次にいきます。

《イエスはこの「主の祈」において、「我らの」という語をもつて祈るべきことを教えられておられる。

「天にいます我らの父よ」ということ。ところが、「我ら」といきなり複数で言うのは早い。「我ら」というのが本当に祈れるためには、その前に「わが」という「われ」がないといけない。私自身が本当に主によつて贖われて、神の子とされて天国人とされたという、それがあつて初めて、そういう兄弟姉妹が共にあるときに、「我ら」ということが祈れるのであつて、そういう体験、霊的なそういう次元に入れていただいていない者にとつては、まだ「我ら」ということは言えないんだということを次に言つておられます。

この「我らの」が真に「我らの」になるためには「わが」が先行しなければならぬ。まず「わが父」との祈がないならば、「我らの父」にはならない。私たちが真に救贖のよろこびに入つたとき、

「汝はわが愛しむ子なり、われ汝を悦ぶ」(マルコ・11)

との言を、イエスの受洗のときの神の言を、私たちの個性の実存的な意味において、恩寵の言として聞いたのである。

我々の全存在においてしっかり受けとることが大事だということです。

即ち私たちは、神から「汝」と呼ばれて、はじめて、「われ」を自覚した。《

神さまから「誰々くん。おい、誰々」と名前を呼ばれてはじめて、「われ」というものを自覚した。呼ばれないで、「われ」というものを、そんな自覚できるものではないということが次に出てきます。これは放蕩息子がそうだと。

そして、少しとばしまして、終りから6行目のところ、



《しかもそのように「父よ」と呼び得るためには、即ち私たちが子としての「われ」の自覚に来るためには、神の御霊に導かれることを要したのである (ロマ8・14)。

「神の御霊」、この「子たるの霊」がないと、本当の意味で「父よ」とか、父の前にある子という自覚には来れないんだと。

そのように「子とせられたる者の霊を受けた」ことによって、「我らはアバ父よと呼ぶ」ことができたのである (ロマ8・15、ガラテヤ4・6)。

しかもそのような「御霊」を受けることは、キリストの十字架の贖罪の恩恵に浴することなくして、罪よりの完全なる解放なくして、どうしてあり得ようか。

さつきから申しましたように、「子たるの霊」の自覚に来るには、絶対にキリストの十字架の贖い、赦し、それを深く受けとってはじめて、そこへたどりつくことができる。

御霊を私たちが告白するときは、必然的に、十字架の恩恵の下でいわれているのであることを、明言して置かねばならない。ここで私が聖霊を強調するのは、特に、歴史的な使命と意味を感じるからである。しかし私は聖霊を強調するとも、決してこの十字架の恩恵の場をはずしていつているのではない。パウロがみ霊のことをあれほど強調しているのも、十字架の下であり、この千歳の磐の上に立つてであった。私もまたその点で全くパウロ的であらんと欲する。どうかこのことを誤解しないようにしていただきたい。そのわけは、福音書におけるみ霊は、自然的・二元的な霊とは異なるところの、キリストが十字架を経て復活した後、父に請うて我らのためにつかわしたもうた「キリストの霊」であるからである。》

「自然的・二元的な霊とは異なる」というのがまた大事なことなんです。さつき、諸霊があると申しました。「自然的・二元的な霊」というのは、生まれながらの霊ということです。狐にも霊あり、蛇にも霊あり。その他、もろもろの霊がこの地上にはうようよしています。そういう霊によって目先のことを見分けたりすることがあるわけです。占いというものもそうです。人を透視して、

「あなたの背後に何か霊がついていますよ。清めましょう」

とか。そういうのは全部、この「二元的な霊」です。そんなもので驚いていたらダメです。非常にごく小範囲しか見えない霊なんです。キリストの霊というのは全然違いますから。だから、いわゆる「霊的」ということを誤解しないでほしい。先生が本当の意味で「霊的」と仰るときは、十字架を通じて流れてくる霊、その霊に導かれている姿を「霊的」と仰っている。別な言葉で言うとは、

「霊的とは神中心という姿である」

ということ。そうでない単なる自然の霊は、人間の肉の欲望を満たすだけのことだ。「金を儲けたいけれども、どっちの方角で商売したらよいか」とか。「あっちの方角がよろしい」と言われて、そっちへ行ったら儲かったと、そういう霊は自然的霊です。そんなものは人



間の肉の欲望を助けてくれるだけで、それに導かれたら、最期はドボーンと地獄ですよ。そうではなくて、本当の神さまの霊は聖い霊ですから。神さまを立てている霊ですから、その前には自分が否定されなければならぬ。自己否定されていないとダメなんです。そういうことも後に出てきます。だから、先生が「聖霊」という霊を強調なさるときには、《福音書におけるみ霊は、自然的・二元的な霊とは異なるところの、キリストが十字架を経て復活した後、父に請うて我らのためにつかわしたもうた「キリストの霊」であるからである。

「私が父の御許に行けば、助主である聖霊を遣わす。私が行かなければ、霊は降^{くだ}つてこない」と、キリストは何度も仰っている。

「イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ（人々に）降^{くだ}らざりしなり」（ヨハネ7・39）

とある如く、十字架による罪の贖いぬきのキリストの霊は我らに何の関わりもない。

十字架の贖いがあつてはじめて、父の御許から降してくださった霊、実はそれはキリストの霊であり、キリストの分身である。キリストは天にいまし、父の御許にいらつしやるんだけれども、そのご自分の分身として、御霊、助主^{たすけぬし}を送つてくださる。だから、父なる神、キリストそして聖霊の「三位一体」というようなことが言われるんです。

ペンテコステはそうにして来たのである（使徒行伝1〜2章参照）。十字架と復活の

恩恵と生命の光の下でこそ、聖霊は強調されねばならない。》

そういう聖霊を受けた者たちの集まりが「エクレシア」なんです。みんなキリストにつながっていますから、キリストからキリストの霊を頂いた、霊の兄弟姉妹です。だから、自然に「我らの父よ」と、この「我ら」というのが出てくる。ところが、キリストと関わりのない人に、いきなり「我ら」に仲間入りしてくださいと言っても、それは無理ではないかということが次に出てきます。次の19頁の4行目です。

《あがなわれない者たちにとっては、神を「父」と呼ぶことはできないからである。

「あがなわれない者たち」とは、本当はみんな贖われてしまったんだけど、それを受けとっていない人たちということ。キリストはすべての人のためにご自身を捧げてくださったけれども、それを主体的に受けとらなければ、それはその人のものにならない。だから、それを受けとっていない人たち、それが「あがなわれない者たち」ということです。

「父」を知らざる「父」の子らたる「彼ら」のためにこそ、「我ら」はこの「父」を告白しなければならぬのである。》

「父を知らざる父の子らたる彼らのためにこそ」とは名文ですね。父を知らない彼らのためにこそ我々は父を告白して、彼らに本当の父を知らしめようとする。お父さん探しです。そういうことをしようということがここに書かれている。父を知らざる、しかし、父の子であることは変わりないんです。しかし、彼らは父を知らない。だから、本当に知ってく



れるようにと、そういう執成しの祈です。

●二 御名讃仰

後は飛ばしまして、次に20頁の「二 御名讃仰」に参ります。

《汝のみ名が聖としてあがめられんことを》(マタイ6・9下)

大切なことは、

「汝のみ聖なり」(黙15・4)

であって、我らの拝する神の御名が「聖」であるという自覚である。諸霊がある。しかし、我らの父なる神のみ名は「聖」い。この「聖」に対して我々は「罪」「けがれ」として徹底的に別かたれ、自覚されねばならない。》

これもまた大事です。さつきから、諸霊があると言いました。十字架ぬきでいきなり霊とつながるときには、それは危ない。それは、小池先生は「エロスの親しみ」という言葉で表現しておられます。そうではなくて、まず神さまの前に徹底的に我々は罪びと、けがれたる者として自覚されねばならない。「罪びと」ということは神さまのご意志に対して自分の意志を立ててしまつて、「はいつ」と言えない姿。神さまよりも自分を大事にする姿。それはやがては、人よりも自分を大事にする。人を愛することのできない姿、というふう

に現れてくるわけですけれども。そういう姿を「罪」というんです。

「ああいう悪い事をしました。こういう悪い事をしました」

というのは、そこから派生してくる枝葉にすぎません。

「存在そのものが実は罪であるということ。それを徹底的に自覚しなさい」

というところが、日本という国はあいまいなんです。墨絵というのがありますね。ぼかされています。あいまいなんです。ハッキリすることを嫌がる。だから、「罪」ということを言うと、拒否反応を起こす。

「そんなことを言わないで。まあ、いいじゃないの。抱き合おうよ」

と、こうなる。ところが、この福音というのはそこが厳しいんです。まずは否定が来る。否定が来たあとに、無条件の赦し、無条件の肯定が来る。日本人は否定がきつちりできてませんから、肯定もできてない。不十分なんです。これが残念なんです。だから、今になって、

「昔は良かった。昔に帰ろう。今の時代はダメだから、昔へ帰ろう」

と言う。「今がダメだから」という、そのダメさを否定する否定が、本当に十字架におけるような徹底的な自己否定ではなくて、

「戦後のあいまいなダメな、道徳も何もできてない、そんな今に比べれば、戦前は良かった。戦前に帰ろう。日本には良いものが一杯あった」



と。それは確かにありましたよ。

「教育勅語の中には素晴らしいことが書いてある。だから、昔へ帰ろう」

と。これも私は、中途半端だと言うんです。戦争に敗れて、とにかくスツカラカンになって、ズタズタに引き裂かれた。そのときに、本当は神さまの前に、

「私たちは本当に傲慢でした。神ならぬものを神として拝し、本当に傲慢でした」

と平伏すべきでした。他の人は知りませんよ、他の民族は知りません。少なくとも我々の自覚としては、

「神さま、徹底的に私たちは審かれました。しかし、本当の審きは十字架が受けとつてくださいました。だから、我々は叩かれたけれども、実は十字架の本当の審判、十字架において現れた神さまの審判、それを受けとるきつかけとしてくださいました。だから、私たちは十字架で徹底的に自己否定されて、あそこで自分自身が、日本の国が十字架されたということを受けとつて、そして今度は、復活のキリストの生命、死んでも死なない生命、永遠に輝く愛の生命、そこに我々は生きます。それが本当の平和の基礎です。平和国家というのは、そこへ来ないと、本当の平和は来ません」

と。私はそういう意味において平和憲法というものは素晴らしいと思った。ところが、今はどうですか。神さまとの縁を切ってしまったでしょ。

無理もない。同じ肉の次元だったら、あんなものは邪魔になりますよ。敵方が武装するなら、こつちも武装しよう。敵が一発なぐつてくるならば、こつちも二発なぐろう。これがこの世の論理ですから。けれども、本当に日本が平和国家として生まれ変わるなら、十字架の碎けをいただきたい、

「もう、私たちは武器を取らない。しかし、武器以上の霊の武器、御霊の剣^{つるぎ}、それで全世界に戦います。霊の戦いをします。全世界に私たちはキリストの愛の王国を宣言していきます。そのために、どんなに私たちが惨めな思いをしても、それはもういいんです」

と。そのことを国民全部が本当に自覚したら、それはもの凄いいものです。そんな国民を侵略するような民は、神さまはただではおきません。そんなものは審きたまいます。ところが、それができないで、今日に到った。もう遅いですね、今では。実に私は無念残念で仕方がない。

本当の否定があつて、本当の肯定が来る。その否定というのは、死をも滅ぼしている否定ですから、あの十字架の贖いというのは。罪をも死をもすべてを徹底的に打ち砕いて、そして、本当の生命、高次元の生命、死んでも死なない生命を与えてくださる。

「原爆が爆発しようが、水爆が破裂しようが、もつと凄いいもので地球がふっ飛ぼうが、どっこい、そんなもので飛ぶような生命ではないぞ」



と。

「身体を滅ぼすことができても、魂を滅ぼすことのできないような者どもを恐れるな。その魂をゲヘナの火に投げ込む権威ある方を畏れなさい」

と、キリストはそう言ってくださった。私たちはそのキリストをいただいている。だから、世の中がどうひっくり返ろうと、これをいただいていたら、常に勝利である。常に「アーメン、ハレルヤ！」である。それを叫ぶのが私たちの使命です。誰も叫んでくれなければ、私たちが叫ぼうではないか。これがこの少数の我々、遺された神の民なんです。その叫びがこの小池先生の「主の祈」なんです。そういうふうな角度で受けとっていただきたい。

●聖名のゆえ

次に21頁の6行目に行きます。

《その聖なる者、至高者が、低く「僕」の相において天降りして、人間の罪のどん底に立ち、救贖をもたらした給うたのである。

これがイエス・キリストというお方です。いと高き聖なるお方がいと低くどん底に立つて、しかも私たちを救い上げるために、私たちを聖めるために、真つ白にしてくださるために、あの十字架を負ってくださった。この救いをもたらしたもうたのである。それが主の僕という姿であると。少し飛ばしまして、

「汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて汝らの智慧と義と聖と救贖とになり給えり」(コリント前1・30)

パウロの言葉ですね。彼イエスは神に立てられて、あなた方の智慧であり義であり聖であり、そして贖い救いとなってくださった。

とある如く、我らの聖者は即ち贖主である。

終りから3行目のところ、

それ故にあがなわれたる者は聖霊をやどす「聖徒」であり、「神の宮」(コリ前3・16)

であり、「聖霊の宮」(コリ前6・19)である。》

だからこそ、

「あなたの御名を聖として崇めさせてください」

という祈りが自然な祈として祈れる。こちらは贖われ、聖とせられたからこそ、あなたの御名を聖として崇めさせてくださいと。その祈を祈るとき自分たちは投げ出している。自分は十字架でもうふっ飛ばされて、あなたの御意になりますようにと、自分を提身して投げ出したところで祈っている。この祈だということなんです。そして、次の22頁の3行目、

《かくて一切は、この神の聖名のゆえにあり、聖名のためにある。》

聖名のゆえであり、聖名のためである。我々はもはや自分のためには生きない。我々のために生命を棄ててくださった方のために生きる。その方に身を捧げて生きる。その方がそ



れを望んでくださっているから生きる。

「この世でもう望みがなくなった。だから、私は自分で命を絶とう。私の地上の人生にしめくくりをして、さよならいたします。遺書を書きます」

と言う人に私はこう呼びかけたい。我々は人間だけの社会で生きていたら、人間だけだったら、無理もないと思う。けれども、待つてください。あなたは地上だけの存在ではない。神さまという世界に包まれたあなたなんです。見えないけれども、神さまがあなたに働きかけていらつしやる。救い主イエス・キリストの霊が今もあなたを愛して働きかけていらつしやるんです。死ぬのは早すぎます。まずは、キリストをいただいて、気づいて、それから出直して、それでもダメだったら、あなたは今なさろうとしていることをなさってください。でも、あなたが自分で自分の生命を絶つのは、もつと先でも遅すぎることはないはずです。いっぺん生命を絶ち切ってしまったら、もう始められない。あなたはまだ知らないことが一杯あるんです。神さまのご愛に、人間には絶望しても、絶望しないでいい方がいらつしやることに気づいてください。私たちの救い主はこう仰った。

「幸いなるかな。今、悲しんでいる者。幸いなるかな、今泣いている者よ」

と仰ってください。決して、

「幸いなるかな、今笑っている者。幸いなるかな、お金持ちよ」

とは仰らなかった。

「幸いなるかな、貧乏な者よ」

と言ってください。その方は

「日毎の糧を祈ろう」

と仰った。

「たくさんさんの倉の中に穀物が一杯あるのは、そんな者はダメだ」

と仰った。

「日毎の糧を今日もくださいと言って、一日一日を神さまにお願いして、そして、いただいて、神さまと一緒に歩んでいく生活というのも結構うれしい楽しいものです。あなたはもうどん底まで来られたんだから、あとは上がっていくだけなんですよ」

と、そう言うて呼びかけてあげる。それしか私はないと思います。

「自殺が善であるか、悪であるか」

とか、

「自分で自分の生命を決定するのは自己決定で、人間の権利だ」

とか、そんなことではない。そういう次元で好きなことを仰っていればよろしいし、私も法律家としてはそういうふうに申します。けれども、

「人間はそれを超えた尊い存在なんです。愛してくださっている方に目覚めるべき



存在だ。愛の呼びかけに答えるべき存在だということ、そのことを知ってください。それからでも遅くはない」

と。こう呼びかけたわけなんです。だから、

「一切はこの神の御名のゆえにあり、御名のためである」

ということ。よく「御名のゆえにこそ」ということが出てきます。あの詩篇第23篇にも、

「御名のゆえに我を正しき道に導きたまえ」

とある。「すべて、御名のゆえ」というのは、それだけを切り離して見ようとする、

「なんだ、神さまは私たちを手段にしている。自分の栄光が現れるような、我々は単なる道具か。つまらないな」

なんて、これが人間の思いです。キリスト教に躓かれる方はそういうことが多い。

生まれながら目の見えない盲人がずっともの乞いして、そこに坐っていた。弟子たちは、

「どうしてなんですか。誰の罪ですか。この人の罪ですか、親の罪ですか」

と訊^きいた。イエスは、

「この人の罪でも、親の罪でもない。ただ彼の上に神の栄光が現れるためである」

と仰った。その場面にでつくわしたある方が

「腹がたつ。人を盲人に造っておいて、神の栄光の現れるためとは何だ」

と言った。イエスはそこでその方を癒されました。唾で泥をこねて目に付けて、

「あのシュロアムの川で洗いなさい」

と。そして洗いましたら目が見えるようになった。正に栄光が現れたんです。その方は、

「神さまが自分自身のために人間を病人につくつたり、目が見えない、足が立たない、耳が聞こえない、そんな姿につくっておいて、そして、それが解かれたら、

神の栄光だとはとんでもない」

といつて躓いた。それは、残念ながら、自分自身という存在が神さまといかなる関わりがあるか、それをぬきにして、

「あの人は気の毒、この人は気の毒。神さまは身勝手。あそこにあんなことが起こ

っているのに、神さまはそれでもいいのか」

というふうに、自分を抜きにして、いろいろな現象をとらえて批判している。ところが、あなたは何ものですかという、その問には何も答えていない。自分が本当に神さまの前に立てない。徹底的に自己否定されなければならない。「御意を」なんて祈れない。そういう人間である。そういう人間のために生命を投げ出して、あの残酷な十字架を受けとって、そして我々のために——いや、私のために——十字架に身を棄ててくださった。そのお方の前に立てば、そのお方の愛を受ければ、

「はいっ。御名の栄光のためにこの僕を用いてください。これが恩返しです」

と言う他はない。「御名のゆえに」というのは恩返しなんです。無条件でもう、価なくして



いただく。これは何とも引き換えにすることはできない。この世の中は、

「あれをしていただいたら、これをしよう。これを差し出せば、あれをしてくださいますか」

という「ギブ・アンド・テイク」(give and take)なんですから、キリストの無条件の赦しというのは、こっちから何もギブ(与える)できない。何を持って行つたつて、それで引き換えができるような次元ではない。だから、価なくして、功なくして、ただただ恵みとさせていただく。そのかわり、いただいた以上はもう、

「自分を捧げます」

と言って、恩返しとして自分を捧げます。そして、捧げた自分が神さまがお用いくださつて、輝いていくんです。こんなありがたいことはない。神さまは人間を目覚ましめようと思って、いろんなことをなさっている。本当にいろんなことをなつていらっしゃるんです。本当は神の言葉をもみんながスーッと受けとつて、スーッと変貌したらもう何も文句ないけれども、人間はひねくれているから、なかなか受けとつてくれない。だから、いろんな手段を用いて、神さまは愛を示そうとなさっている。

私は今日、午後に申し上げるつもりですけども、K君はやはり「一粒の麦」となつて、神さまのご栄光を現すために、ご自分の生命を捧げられたと私は思っています。あんな純情なK青年がなぜ早く世を去らねばならなかったか。こういう非常手段(交通事故)を通して神さまはご自分の愛を示そうとなさっているんだと、私はそう信じている。

「人その友のために己の生命を棄つる。これより大なる愛はなし」

と。自分が犠牲になつて、友の生命を救われたわけです。それは神さまがそのようになさつてくださったと、私は信じています。

「そのような非常手段を通して、目覚めてほしい。K君の友たちよ、会社の方々よ、目覚めてほしい。神さまの前に目覚めてほしい。あなた方が目覚めることがK君の生命が無駄でなかったということ、死が無駄でなかったということの証だ」と、私にはそう聞こえてくるんです。

だから、目が見えない姿で盲目で生まれ、もの乞ひしていたその人にイエスさまは働きかけて、目が開かれ、魂が救われた。そういう御業を通して、いろんな方に神さまは語りかけている。すべてがそうなんです。そして、そういう方々は天で輝くんです。素晴らしきことになる。

● 終末論

次の23頁にいきます。1行目。

《換言すればこの祈は、

「我らの実存を以て汝のみ名を聖として証示すべく生き得ますように」



ということである。

しかも、その「実存」ということを仰って、4行目、決してこの「実存」が人間の側、私の側において、単なる倫理性において、いわれるような実存ではない。全くキリストによるところの、キリストが自らみ霊を以てこのダメな罪びとにおいて実存してくださる実存をいっているのである。》

キリストが私の中に乗り込んできて、そして、

「お前をもう解放放った。お前の罪は片づけた。お前は聖い。これから私が主だよ。従ってきなさい」

と言って、キリストが私の中に切り込んできて、そして、キリストの霊をうちにくださって、そして、

「さあ一緒に生きよう」

と、このようにしてどこまでも、キリストという主体が人間を引つ張って行ってくくださる。そういう主体的意志的な動的存在、そういう私なんだということをしてここで仰っている。いわゆる実存主義で、「私は」と言って胸を張っている、そういうのではない。どこまでも、神主体、キリスト主体であって、こちらは受け身なんです。受け身だけれども、その受け身の人間が、実存は一番躍動している。「何もない」と言っていたキリストが一番輝いていたように、神さまの前に、キリストの前に投げ出しているその人間が、否定されているはずの人間が一番輝かしく素晴らしく生きている。これが御国の姿だということですよ。

9行目から、

《聖なる栄光が聖名に帰せられて、「我」はそこにはない。「ない」とは形而上学的に

「形而上学的に」というのは、「観念的に、哲学的に」ということ。

「無」というのではなく、「我」が実存的に否定しつくされているのである。ああこの死的否定の中に飲ひ讃える聖名の讃美よ。福音における生死の論理は最も深い倫理性を有つ。それは福音における倫理性は、絶対に終末論的性格のものであって、「有」とか「無」

とかの形而上学的範疇と異なり、生か死かの死活問題に関わる。》

ここに「終末論」という言葉が出てきましたが、「終末論」というのは、簡単に申しますと、我々の存在そのものが死という一つのピリオドに向かって歩んでいるということ。逆に言ううと、死というもののから逆にこつちを見ている。

「死というものをスタートとして、さあ私たちの今の在り方はいかに在るべきか」

と、これを見ていくのが、終末論的な人生の生き方という。普通は自然的に、生まれて段々輝いて行って、いつしか天国へ行くというのが、これは自然的な姿です。ところが実は、そんなそのまま天国に行くような人間存在ではない。必ず、ピークに来たら、あとは放物線を描いてストーンと落ちていくわけです。それで、

「^{はかな}い、儚い。身体も動かない。頭も悪くなってきた」



というのが、我々の自然的な生き方です。それに対して、終末論的な生き方というのは、「死というものは絶対にやってくる。それを前にして、いつ^{たお}仆れても恥ない生き方をしよう。悔いなく生きよう」

と。それがいつ来るかわからない。迫りつつある。しかしながら、わからない。わからないから、一日一日を精一杯生きていく。そういう生き方を終末的生き方という。

それからもうひとつは、人類の歴史です。歴史というのは、のんびんだらりといつまでもそのまま行くのではない。必ず、神の審判、世の終りというものが来る。これもキリストが仰っている。世の終りがくる。審判がくる。その審判を前にして、人類はどのような生き方をするのか。民族はどのような生き方をするのか。歴史の中でどう生きていくのか。民族的、歴史的な角度で世の終りを見ますときに、それを終末論と言うんです。

個人の終末と人類の歴史の終末、この二つを重ね合わせて、そういう中で生きていく我々、あるいは日本民族がどのように生きていくかということ、生き方をさぐっていくのが終末論的な生き方ということになるわけです。

実は、このキリストの福音というのは絶えず、向こうの終りの世界から語られている。終末の光の中で語られている。終末というのは審判であると同時に、それを突破しますと、神の国が輝くんです。キリストが

「幸いなるかな。今悲しむ者」

と仰っているのは、

「今悲しんでいる人は向こうの世界で輝くんだ。今苦しんでいる人は向こうの世界で輝くんだから」

ということ。我々にとつては死ですべてが終りなんですけれども、主さまの死というのはもう突破されたですから、向こうに輝いている光です。その光を浴びて、天国体としてのキリストが地に現れて、そして、

「天国の現実はどうなんだよ。跛者は歩み、癩病人は潔められ、死人は甦る。それが本当の天国の現実だよ」

と言って、あの奇蹟の御業を一杯なさった。だから、あれは奇蹟ではなくて、

「天国においては、来たるべき世界においては、こういうのが本当の現実だ」

という、その予告編だったんです。だから、キリストがなさった業そのものに囚われてはダメです。「夢をもう一度」といつて、もつともつと奇蹟をやってくださいというのは、これはご利益なんです。そうではなくて、キリストが示されたものの、これが質的に本当の天国なんだ。そして、質的には、

「あなた方はたとえ病人であつても、その質のものをいただいたならば、その人は天国人だ。身体はベッドにくくりつけられていても、魂は天翔^{あまか}けつっている。これを受けとつた人はもう天国人なんだよ」



と。

「私に躓^{つまず}かない者は幸いである」

と言われたのはそれなんです。だから、「夢をもう一度」と、奇蹟を一杯見せるような伝道者がもしいたなら、私はちよつと疑いますね。そうではなくて、本当にイエスさまはご自分の十字架の死を通して、我々と天国とを隔てている隔ての壁を打ち砕いて、そして、いつでも天国の光が射し込んでくるような姿に私たちを変えてくださっている。そして、「お前たちはやがて終末において本当に輝く生き方をしろ」と。

「そのとき、義人は太陽の如く輝く」

という言葉がマタイ伝の中に出てきます。だからこそ、

「今貧乏なひと、今泣いているひと、主さまのみ懷の中で、御名のゆえにそれを感謝して受けとりなさい」

ということが言われるんです。それでなかったら、

「宗教は阿片^{あへん}だ。騙^{だま}されているんだ。さあ立ち上がろうよ」

ということになるわけです。けれども、我々の福音は、

「歯向かうな」

ということが書かれていますね。暴君がいる。それに対して歯向かうなということ、言われている。いかにも敗北主義なんですけれども、実は、剣^{つるぎ}に対して剣で立ち向かって、何もそこから生まれて来ない。

「悪に対して善でもって勝ちなさい」

ということが言われています。キリストはそのことをなさった。我々は100%にはできませんけれども。気持ちにおいては、そういうふうにして、同じレベルで勝った負けたではなくて、もうひとつ高次元のレベルで本当に勝利をいただいているから、それを知らない人たちを引き上げてあげようではないかと。殴^{なぐ}りかかってくる者は気の毒な人だ。本当の神さまの世界がわかったら、そんな殴りかかるなんてできないはずだ。いじめるなんてできないはずだと。どうぞ目覚めてほしいと言って祈るのが、

「父よ、彼らを許したまえ。彼らは知らないでやっているんですから」

という執成^{とりな}しの祈なんです。それをやせ我慢で、

「許さねばならない——こんちくしょう——許さねばならない」

なんて(笑)、そんなことではとても、こつちまでが苦しくなる。

だから、どんなキリストの言葉も、主さまの前に身を投げ出して平伏して、子たるの霊をいただいて主さまと同じ心になりきったときに、はじめて祈れるんです。それまでは、「許せ」なんて言われたって、許せません。それが人間の常ですもの。それでいいんです。だから、どこまでも主さまと同じ姿に我々が変えられていくときに、主の御言は全部成就していく。



我々は天国人なんですね。それは主がなさってくださいることであって、肉なる我々が自分の力でできるものではない。徹底的な自己否定です。それでいいんです。しかも、自己否定だって中途半端。それを十字架が完全に自己否定を、徹底的否定をしてくださった。

そして、復活という徹底的肯定です。そして、聖霊という永遠の生命。それをドカーンと一人ひとりにくださった。もう喜ばないではられないんです、本当は。喜ばないではられない。ところが、あまりにも目の前の身の回りのことが天国とかけ離れているから、ついつい心がそちらに奪われて、せつかくの喜びがいつのまにか段々ポシャッて行くんですけれども。だから、集会ごとに、

「聖霊という生命は、喜ばないではられない」

と、みんなでそれを自覚するんです。だから、兄弟姉妹の祈は大事です。兄弟姉妹が集まって、そして祈ることが大事なことです。そういうふうにお受けとりになってください。

●三 聖国来臨

その次に、「三 聖国来臨」というところに行きます。25頁の3行目、

《「盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦えらせられ、貧しき者は福音を聞かせられる。およそ我につまづかぬ者は幸福なり。」(マタイ

11・56)

「彼の一切の大能のわざ、神癒のわざは、神の聖旨、聖愛の発露であった。それは神の栄光のあらわれとして、終末的性格のものであって、断じて現世的御利益的な霊力ではない。これにつまづいたのが、おのれを義とする祭司、学者、パリサイの徒輩であった。キリストは、霊肉一体としての全人の救を、み国において、新天新地到来のあかつきにおいて、約束し給う。同時にその実存は、地上において、我らの霊のために倫理という語ではつまみきれない高次のいのちの霊言をもって、我らの肉体のためには、その聖なるあわれみの霊力をもって、み国と同質のものを示し給った。》

山上の垂訓の倫理はもの凄く高い。我々の道徳をはるかに超えたものです。それからまた、あそこで示してくださった御霊の力というものは凄いものでした。そういう主さまが私たちを抱いてくださる。

「活かすものは霊なり、わが汝らに語りし言は霊なり、生命なり」(ヨハネ6・63)である。

「わが言をききて我を遣わし給いし者を信する人は、永遠の生命をもちかつ審判に至らず、死より生命に移れるなり」(ヨハネ5・24)

ヨハネ伝によれば「み国」はかかる「永遠の生命」の現実性において示されている。

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は、死ぬとも生きん。およそ生きて我



を信ずる者は、永遠に死なざるべし」(ヨハネ11・25)

の如き聖言は、ラザロの復活という大能のあらわれの際に発せられた。キリストの言動は根源的なそのような終末の聖国の角度から語られ、かつ行ぜられていた。」

終末の光の中でそれが行われたと。それから、次の27頁へ飛びます。

《「それ神の国は飲食にあらず、義と平和と聖霊によれる歓喜とに在るなり。」(ロマ14・17)

とか、

「神の国は言にあらず、能力にあればなり」(コリント前4・20)

とか言われているように、「み国」を祈る現実には、み国的な現実には我々が現に在るそのような場においてこそ、真に待望されるのである。》

よく、先生は仰いましたね。

「聖国がうちに来ているから、『聖国を来たらせたまえ』と祈れるんだ」

と。全然、自分の身体の中に聖国が来ていないひとが、ただ「聖国を来たらせたまえ」と、なにか夢のような祈をするのではない。聖国が現に来ている。それは「御霊」という聖国なんです。御霊において聖国が来ている。だから、「いよいよ聖国を来たらせたまえ」と言つて、向こうの聖国を引き寄せようとして祈る。こういう祈なんだと。だから、日々にその終末に直面している気持ちで——明日のことはわからない。今日一日という気持ちで——毎朝祈る祈です。

「聖国を来たらせたまえ」というのは聖国が来ているから祈れるんだよ」

ということ、よく仰いました。これがそういうことですね。ここは素晴らしい。

《「み国」を祈る現実には、み国的な現実には我々が現に在るそのような場においてこそ、真に待望されるのである。このことは、次の祈の句

というのは、聖意体現の句です。

と共にあきらかとなる。そのみ国の住民は即ち山上の垂訓に「恵福なるかな」とキリストに言われている如き人々である。何らかの意味で真に十字架を負っている人である。また十字架を真に負う人々は、十字架の下について倒れる人々である。

ここは私は好きですね。み国の住人、天国で輝く人はどういうひとなのか。

「何らかの意味で真に十字架を負っている人である。また十字架を本当に負う人々は十字架の下について倒れる人々である」

と。

負いきれぬ十字架を負って倒れた人々が、み国に最もふさわしき人々であるに相違ない。》

だから、倒れることは喜びなんです。この地上で何も勝利する必要はない。地上では倒れた。しかし、天上で輝く。もう地上で満ち足りた生涯を送った人は、天上ではもういいでしょう。



「あなたはもういいでしょう」と言われる。

あのラザロの話(ルカ16・20～31)がありましたね。お金持の門前でもの乞いしながら、出来物ができて犬がペロペロ舐^なめていた。その人には、天使が迎えにきました。ところが、お金持は盛大なお葬式をやってもらったけれども、逝^いった先は地獄でした。そして、目を天に向けて見ると、天上にラザロがいるじゃないの。こっちは火の炎で苦しんでいる。

「ラザロよ。来て、助けてくれ」

と、天使に呼びかけた。ところが、

「いやいや、こことそつちは越えがたい溝^{みぞ}があつて越えられない。あなたは地上で充分なことをしてもらった。だから、いいでしょ。ラザロは生前、非常に苦勞した。だから、ここで慰められているんですよ」

「ああ、そうでしたら、地上にはまだ私の兄弟がたくさん残つて同じような生活をしていますから、ぜひ、ラザロを甦^{よみがえ}らせて警告を発してください」

と言うんですけれども、

「いやいや、たとえ甦^{よみがえ}った人間が行つたつて、ダメです。神の御言に、モーゼを通して語られた御言に聞けない人は、たとえラザロが甦^{よみがえ}つて、天国はかくかくしかじかと言つたつて、とうてい信じない」

と。そういう言葉がある。あれは実に真実迫るものがあります。

ですから、決して地上での幸不幸、それをすべてだと思わないことです。我々クリスチャンがそれを本当に生き抜かなければ、クリスチャンでない方は誰も信じてくれません。私たちクリスチャンが倒れ倒れて、地上では本当にいろんなマイナスを背負つて生きながら、それでもなお微笑^{ほほえ}んで、

「主さまは素晴らしい」

と言つていてこそ、他の人は

「あの人があんなに喜んでいいるなら、自分も行つてみようかな」

と、こうなるわけですね。地上でクリスチャンが、「しんどくて、しんどくて」(笑)なんて言つていたら、これでは本当に誰もついて来ませんよ。そういうことなんですよね。

●四 聖意体現

それから次に、いよいよ、「四 聖意体現」にいきます。本論はここなんですけれども、今日はもう時間が少なくなつたので、またの時にもう少し詳しくと思いますが、エッセンスだけでも見ていきましよう。

《「汝^{みこころ}の御意の成し遂げられんことを、天に於ける如く地においても」(マタイ6・10

下)

「汝の御意の成し遂げられんことを」との言は、イエスがゲッセマネで、最も深刻な祈



において、そのまま叫ばれた言葉である。それは最早単なる言ではなく、宇宙にしみ渡り、乾坤をつらぬいてひびき渡った呻きであった。「汝の御意が成る」ためには、わが意が否定されねばならない。決定的な肯定がなされるためには、決定的な否定が生じなければならぬ。神の意志と私たちの意志とが、その如く相反するのは、私たちの実存が根本的に失われた実存であるからである。

神さまとの結びつきを持たない実存というのは「失われた実存」であると。

福音による信仰的、霊的実存のほかの実存は、すべて挫折する没落への実存であり、虚無への実存である。哲学的、倫理的、美的実存は、すべて絶望への実存である。

ハッキリ書いておられますね。どんなに、人の目にはきらびらかに見えましよう、素晴らしく見えましよう、本当にこの福音と結びついていない、神さまの生命と結びついていない人間の生きざまは——「実存」というのは「生きざま」と翻訳しましよう——そういう生きざまは結局は没落への実存だと。結局は否定につながってしまう。「ああ、あの頃は楽しかったな」という思い出の中にしか生きられない。だから、誰かに伝えようとして、自分史を一生懸命に書くわけです。それは結構ですけども、しかし、もつと凄いものがある。その光に照らされて、あなたの生きざまは輝くんですよ、ということを書いてあげたい。

ただ信仰の実存においてのみ、それは審判への実存を転換して、救贖への実存として実存が実現する。

むずかしい言葉です。要するに、十字架というもので全部片づけられているからこそ、どんなにマイナスと見えるものでも全部、十字架でひっくり返されてプラスに転化されてしまう。絶望ということを知らなくなる。すべてのことが相働きて善となってしまうということです。

『ファウスト』の中にメフィストーフレスが出てくる。

「私は否定する霊である」

と言う。すべてを否定してかかる。人間がどんな営みをしてても、

「つまらんよ、そんなものは。どうせ、死ぬんだから。どうせ、人に追い越されてしまうんだから」

と、みんな否定する霊です。それに対して、本当の大肯定の霊、これは御霊なんです。

「どっこいそんなことはない。私がお前を輝かせる。大丈夫だよ」

と。御霊しかありません。本当の人は十字架しかない。だから、その十字架において自分が否定されている。

「もはや我生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生き給うなり」(ガラテヤ

2・20)

と、そこへ来なければ、本当の生き方、生きざま、輝く生きざまはできない。人間のけな



げな努力ではダメだと、そういうことをここで仰ろうとしています。

すなわち、私たちの意志が徹底的に「否^{いな}」と

私たちは主体的意志的な存在だと言いましたが、この主体が全部否定されたときに、本当の肯定の世界に入れる。それ抜きにして、ただ「私は主体だ。私は意志をもっている」とやっているのは、これはダメだということです。ですから、

私たちの意志が徹底的に「否」と審判される烈しい律法の自覚、換言すれば、私たちは神の前に「一人も義人であり得ない」自覚である。それは、パウロがロマ書で明言し、ルッターが真剣に体得した真理である。罪が腹の底から告白されて、神の意志の前に降伏し、わが意志（自己義認、自己追求、自己拡充、自己中心）を否定し去るとき、はじめて、神と我との関係は成り立つのである。

次の30頁1行目、

神に「然り」ということは、おのれに「否」ということである。

神に然りということは、おのれには否ということ。己に否と言っていないければ、神に然りとは言えない。

「主の祈」の中核は正にこの「汝の御意を成させ給え」の一言にある。》

しかも、その「御意^{みこころ}を成させ給え」ということは、自分を横に置いて言えることではない。自分を徹底的に否定してかからないと、この「御意を成させ給え」ということは言えない。そして、次の31頁の7行目へ飛びます。イエスのこの祈、イエスの十字架における自己否定です。

《これと同質なのが、我らの神の「汝の意志」なのである。この「汝の意志をして成らしめ給え」との祈において、我らが否定されることは如何にして可能であるか。それはただこれを実存し、砕け得ざる我らのために、自ら砕け給うたキリストの十字架の恩恵を、パウロの言いし如く「キリストと共に十字架につけられた我」を見ることによって。我が罪のこの身このままこの意志が、既にかしこなる十字架につけられていることを、恩寵として受けとることによって。わが意志がかしこに死んでいることを信じ受けとることによって。その様な砕けの完了、徹底的手術の完了を、キリストが自らわがために十字架においてなし給うたのである。その事実を、現実として受けとることによってのみ、可能なのである。》

このところは本当にもう、皆さん、赤線を引いて大事にしてください。要するに、簡単に言いますと、自己否定なんて簡単にできるものではないということです。

「自分で自己否定した」

と言つても、

「私はもう自分を棄てた。自己否定した。比叡山で修行して来たんですよ」

と言つても、そんなものは何にもならない。自分というものはどこまでいつても、自分を



立てる。

「自分はこんな修行を積んできた。もう自分は誰のためにも身を棄てることができ
る。私はもう全財産を施しました。立派でしょ」

と言って、自分を誇っているわけです。自分を誇ってしまう。人から見たら、

「ああ、あの行者さんは凄い。何もかも棄てて、すごい」

と、人は驚きます。けれども、「そうでしょ、凄いでしょ」と言っている自分というのは、
自分が立っている。それでは何もならない。何も棄てられなくても、

「棄てられない自分を赦してください」

と言って投げ出している、その方がいいんです。

「罪なる我を赦したまえ」

と、お宮さんの鳥居の外でしか祈れなかった罪びとがある。片一方は、

「私は週に一回断食して、十分の一の献金をしています。こういう私にしてくだ

さった神さま、ありがとうございます」

と、なにか立派な祈ですね。ところが、キリストは仰った、

「義とされて家に帰ったのは、この立派な人ではなくて、門の外で胸を打って、『お
赦してください』と祈っているあのんだよ」

と。そうなんです。これがコツですから。これが福音のコツです。自分をサムシング（何
ものか）として、

「私はこれだけのことができました」

と胸を張っているのは、己を立てている。我々はクリスチャンとして、いろんな奉仕をし
ます。そのときにも、

「私は何ものでもありません。あなたが『せよ』と仰ったことをしただけのことです。

私はふつつかな僕です。ただ、あなたがせよと仰ったことをしただけです。何一つ、

誇ることはありません」

と言っている姿が本当の僕の姿なんです。

「これだけのことをしたんだから、ご褒美をください」

ということではない。そういう徹底的な自己否定、その自覚は十字架でだけできるという
ことをここで書きになっている。自分で棄てきれない自分が十字架で既に棄てられてい
る。キリストは自分をお棄てになったときに、私も一緒にそこで棄てられている。キリス
トが砕かれたときに、私も砕かれている。運命共同体だ、一緒だと。十字架でもう一緒に
裁かれた。死はそこで滅ぼされた。だから今度、主が生きられるときに、私も一緒に生き
ていく。すべてにおいて運命共同体である。正にキリストが主さまであり、私は僕である。
正に神さまが父であり、私は子であるということ。そして、「子たるの霊」

を、これを主は下さる。無条件に下さるんです。「聖霊を賜わることがあろうか」という。



そういう生き方。そこから始まっていくよ、という。そこから始まっていく。

31頁の終りから3行目、

《そこには、深い祈と烈しい捨身的行為が必然起こってくる。大死一番とは、キリストの恩恵の力に迫られて突きぬける信仰的行為である。信仰は正に信行であり、かくてキリストとの信交となる。そこに真の聖霊の現実が、根源相があるのである。かくてパウロと共に「キリストわがうちに生き給う」という告白に移る。霊なるキリストをかくの如く受けざる限り、「修養」も「冥想」も「没我」も空しく、それはキリストの十字架と復活の生命を、拒否することであって、福音からの逸脱である。いわゆる「修養」や「神秘」の路でいかに自己を否定しようとも実は自己を肯定しているのである。自己の真の否定は、自ら否定できない根源的な罪性がキリストの十字架において否定されていることを絶対恩恵として受けとることである。

絶対無条件の恵み。それをふつといただく。これでいいんだと。だから、「それでも、まだ私は……」なんて言っているのは、これはいけないですよ。もう、それはいけない。「真の自己否定は、自ら否定できない根源的罪性がキリストの十字架において否定されていることを絶対恩恵として受けとること」これだけだと。

霊的転換によって、霊的実存のいのちに入り、成就されてゆくのである。そうでない限り、自己の否定は観念的な思い込みにすぎず、十字架も復活も、思われたる信仰内容にすぎない。》

そういうことでは困るということ。そういうふうにして、自己が否定されていることに気づいて、「主さま」と言っているところに、神の御霊が流れ込み、御意が臨んでくる。

「お前はこれをするんだよ。私はお前にこれをして欲しいんだよ」

と。これが使命という自覚になる。人間は使命的な存在になっていく。単なる実存ではなくて、使命的な存在です。神さまから課題を授かるんです。

「あなたはこれをしなさい。これをするのが神の栄光だよ」

「はいっ、こんな人間を使つてくださるんですか」

と。プロ野球の選手でも、よく、いっぺん挫折して這い上がった来た選手を、監督がパツと大事なところで使う。そこで活躍する。ヒーローインタビューで、

「監督が使ってくださいました。こんな私を監督が使つてくださったことを感謝いたします」

と言ってますよ。ところが、傲慢な人間は、「何で監督は俺を使わないんだ」とか言ってると思いますけれども。本当の謙虚な選手というのは、

「こんな自分を監督が大事なところで使ってくれた。ありがたいです。監督のためにまだまだ働きます」

と言うんです。我々はそういう気持ちですね。こんな人間を神さまは使つてくださっている。



ご自身の栄光のために用いてくださっている。責任は神さまがとってくださいている。自分で責任をとらなくていい。だから、私だって、今の仕事をそう思っていますよ。口では言いません。そんなこと言ったら、「無責任なやつだ」と言われるから。けれども、

「すべては私の力に余る重い仕事です。私でできることはありません。けれども、この仕事にお付けくださったのは、主さま、あなたです。だから、あなたの御力と御智慧によって使命を全うさせてください。私に何も誇るところはございませんから」

と。これが私の祈なんです。だから、まあ、ある意味では涼しい顔して、気楽に今の仕事をやっていますけれども。これはとんでもない。もし、そういうことがなかったら、私はとても勤まらない。責任は重い。

だから、どんなお仕事であっても、皆さん、どんなつまらないみすばらしい仕事であろうと、すべては主さまが主人公ですから。私は選手に過ぎない。選手は監督の意を受けて、力をいただいて、そして働くだけなんです。そうしたら、気が楽です。できなかったら、

「できません。私には力がありませんでした。できませんでした」

と言えば、それでいい。そこを何か小細工したら、変なことになりますね。ですから、どんなところにあっても、そういうポストであろうと、それは全部、神さまに対して、主さまの導きの中で、主さまに対して私は仕事をいたします。そうすると、この世で無駄な仕事はひとつもないはずです。それは必ず御名の栄光のために、また、世のため人のためにどこかで役立つんだと私は思っています。直接にすぐに現れなくても、どこかで。それはもうすべてを御存知でありたもうキリストが采配さいはいしてくださっているんですから。キリストの采配と作戦によって働かされる選手は恵福えふくなるかなというわけです。

私はスポーツが好きですから、何でもそんなふうに思う。私は走っています、しんどい時でも、

「ああ、主さま。御力によって走らせてください」

なんて祈りながら走ったりとか。代々木公園を四周走る。一周目はゆっくり走って、二周目は少しアップして、三周目にうんと走って、四周目はあとはダウンのつもりで。走れるんですよ。だから、生活の中のすべてのことが主さまと結びついて、その助けの中であつていれば、こうやって手を合わせて祈ってなくても、生活そのものが祈なんです。だから、ある意味では、気が楽になって、そして平安の中で喜びを感じて、そしてそれをわかってくれる友がいるというのはうれしいですよ。誰も知ってくれなければ、寂しいですけどもね。分かちあえる、共に祈りあえる、そういう友がらが居てくれる。これがエクレシア（召会、集会）なんです。だから、

「集会に来てくださいね」

というのはそういうことです。主さまに祈り、そして、お互いに祈り助け合っていく。こ



れが兄弟姉妹なんです。

「私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい」

というのはそういうことだと思っんです。

だから、本当にこの「主の祈」は素晴らしい内容です。私はほんの一部を今日、解説したにすぎませんけれども、どうぞ、今日の話をきっかけにして、また親しんでくださいませ。むずかしい言葉に何も囚われることはありませんから。それでは、このへんで終りにいたします。

● 祈り

祈ります。主さま、今日は小池先生の、生命をかけて書かれ告白された『聖意体現——主の祈』を、その一端を告白させていただきました。本当に40年間、この主の祈をもつて、僕は導かれて参りました。また、先生のいろいろなご講筵はここから発しております。どうぞ、先生の弟子たる我々が本当に先生の心を心とし、それは即、主さまの御心を心とすることです。ありますが、そのようにして、本当の意味で主の証人、福音の戦士として我ら一人ひとりをお用いくださいますように。御霊の主さま、どうぞ、我ら一人ひとりを御助けください。

本当に、あなたは平安をくださいました。この世では得られない平安を、あなたはくださいました。あなたは身をもつて、身を棄てて、私たちをすくい上げ、そして、お前たちはもう神の子だよ、私の兄弟だ、姉妹だと、そのように呼びかけてくださいまして、ありがとうございます。

ここに集われた方々の胸のうちなる熱き祈と共に、今、主イエス・キリストの御名にあつて、御前にお捧げいたします。アーメン。

(参考 本文)

キリスト告白録第3巻『聖意体現』

「聖意体現」

——実存の源なる「主の祈」、私の信仰告白として(マタイ6・9～13)

1959年12月 聖誕節 小池 辰雄

● 序

曠野の預言者ヨハネが、悔改めのバプテスマをヨルダンの流れで施していた。これを知ったイエスも、故郷から彼のもとに出て来て、バプテスマを受けられた。けれども、イエスのみは、水のバプテスマを受けながら、同時に、もう一つ次元の異なつたバプテスマにあ



ずかった。それは即ち、

「水より上る折りしも、天裂けゆき、御霊鴿の如くおのれに降るを見給う。かつ天

より声出づ、汝はわが愛しむ子なり、我汝を悦ぶ。」(マルコ1・10～11)

と書かれてある聖霊のバプテスマであった。

十字架に懸かつて贖罪の鴻業を果たし、墓を蹴破つて復活の霊生を示し給うたイエスは、今もなお天界にキリストとして在まし給う。かくして、ペンテコステの聖霊降臨以来、「キリストに在つて」生きる者の路は顯然と開かれている。

「主の祈」は、まさにこの聖霊の現実において祈るべきものである。この土器を貫いて「聖意を成させたまえ！」と祈りつつ、真の実存を志すのが、神の国を待ち望む者の在り方である。かくて、「聖国を来たらせ給え！」が、むなしからざる悲願となる。「主の祈」の主眼がこの「聖意体现」にあるのでこれを本書の表題とした。

またイエスの有名な「山上の垂訓」の最初の一句が全垂訓、ひいてはイエスのすべての聖言をつかむ秘鍵であることを著者は発見したので、その解説を「霊の貧者」と題して「主の祈」と共にここに編むことにした。読者はむしろこれを先に読んでいただきたい。

挿画はデューラーのデッサンである。ゲッセマネの祈りで、イエスが十字架の苦杯を祈りの中で受けられたことを表している。イエスの姿がまた天界を飛ぶが如くであつて玄妙である。

● まえがき

イエスは百五十の詩篇の祈を、この一つの祈に結晶せしめ給うた。旧約の祈は流れてここに深淵となつて湛えられている。あだかも律法と預言を福音が受けて突き抜け、これを成就したように。「主の祈」は詩篇第一五一篇として、詩篇全篇の祈を嗣いで、これを親しく神のふところにもたらしした。

旧約聖書の「詩篇」は、ルターがいみじくも申した如く、「小聖書」であつて、ある意味で全聖書の心臓をなすものである。そこには、嘆き、訴え、求め、悔改、感謝、讃美等が、個人的に、集団的に、民族的に、さまざまの環境や事情や心境のもとに、祈として告白されている。まことにこれは、神と人との魂の信頼関係による広義の祈であり、讃美である。旧約原典では「詩篇」はテツヒリムと称して「讚美歌集」の意である。

そこには預言者的な気魄も、祭司的な要素もある。それにもかかわらず、「詩篇」には何かある面がなお希薄のように思われる。それは他人のため、敵のため、積極的に、罪のゆるしを祈る愛の祈の乏しいことである。ここに「主の祈」の画竜点睛的な意味がある。そのことは本文解説によつて瞭かとなつて来よう。

「私は信ずる」(クレド)と「使徒信経」の如く宣言するのではなく、主の諭し給うたいのり心を体し、聖霊の翼の蔭にあつて、静かに深く祈ると、それが直ちに、私の



「信仰告白^{クレド}」となるのを覚える。「主の祈」を、私の信仰告白^{クレド}として解説を試みたゆえんである。しかも今日ほど「主の祈」が心底から祈られねば危ない時期^{とき}はない。全世界は今もなお「主の祈」をルッターの言った通り、「十字架につけて」いる。各民族が、そして我ら各個人が、これを新たに、おのが祈として、悔い改めぬ限り、神の審判はその深刻さを増してゆくであろう。しかし、これが真にわが腸^{はらわた}の祈となるとき、神はそれらの魂を用いて聖意を体現せしめ、世の光、地の塩、愛の泉たらしめ給うであろう。二十世紀後半の危機が、「主の祈」を実存せんとする神の民によって突破され、になわれんことを！ げに「主の祈」こそは実存の源である。

以下は、マタイ福音書のギリシヤ語原文による「主の祈」の私訳である。一般に唱えられているもの（註1）、及び現行邦訳聖書とは訳文上に幾分の相違はあるが、やむをえない。私の意図は、表現よりもその内実、ことばの巧拙よりもその根源相への衝迫にある。

【マタイ福音書6:9～13】（私訳）

- 一 9 天に在^います私たちの父様^{とうさま}！
- 二 あなたのみ名が、聖^{せい}としてあがめられますように。
- 三 10 あなたの国が、来ますように。
- 四 あなたのみ意^{こころみ}が、成し遂げられますように、天においてのように、地においても。

五 11 私たちの日用の糧^{かて}を、今日も私たちに、お与え下さい。

六 12 私たちの負債^{おいめ}を、私たちに對してお赦^{ゆる}し下さい、私たちに負債ある者たちを、私たちが赦しましたように。

七 13 私たちを試惑^{こころみ}につり込まないで下さい。私たちを悪しき者から救い出して下さい。

（附）み国と能力^{ちから}と栄光^{さかえ}とは、永遠^{とこしえ}にあなたのものでありますから。アーメン。

【ルカ福音書11:2～4】（私訳）

2 お父様^{とうさま}！ あなたのみ名が、聖としてあがめられますように。あなたの国が、来ますように。

3 私たちの日用の糧^{かて}を、毎日お与え下さい。

4 私たちの罪を、私たちに對してお赦^{ゆる}し下さい、私たちに負債^{おいめ}ある者を皆、私たちが赦しますから。私たちを試惑^{こころみ}につり込まないで下さい。

本書においては、マタイ福音書に従って、次の七項目にわけて解説を試みる。そして「主の祈」の心臓部は「聖意体現」に在ると告白せざるを得ない。ルカ福音書では欠けているが、かくれた心臓は、「罪のゆるし」（ルカ11:4）の祈の奥に動いていると思われる。

マタイ福音書の「主の祈」七項目及び附項は次の如くである。



- 一 父神霊神
- 二 聖名讃仰
- 三 聖国来臨
- 四 聖意体現
- 五 今日一生
- 六 贖罪赦免
- 七 神護救済
- 附 頌栄讃美

そして私はここに、甚だ唐突のようであるが、シュヴァイツァー博士の次の「つけたりの祈」に就いての言葉を附記したい。

「私に不可解に思われたことは——それは学童以前のことでしたが——夕の祈で人間のためにのみ祈るように教えられていたことでした。それゆえ母が私と共に祈って、私にお休みの接吻をしてくれたとき、私はいつもなお、ひそかに自分で作ったつけたりの祈 (Zusatzgebet) をすべての人々に代ってするのでした。それは『愛する神さま、すべて氣息^{いき}をして生きているものを護つて恵んでやつてください。すべての禍害^{わざわい}から防ぎ、やすらかに眠らせてやつてください』というのでした。」 (Albert Schweitzer: "Aus meiner Kinderheit" より)

● 一 父神霊神

「在天の我らの父よ！」 (マタイ6:9上)

主イエスは「目をあげ、天を仰いで」祈りはじめられた。それは、いよいよ御自身が十字架にかけられ、父の「栄光」を現すべき時が近づいたときであつた。このことはヨハネ伝第17章の冒頭に書いてある。いのりに特別の形式はいらない。しかし我らの魂が神にむかつて朝顔のように開け放たれていることは、神のよろこび給うところであろう。イエスはまた「父よ、時来れり、……」とつづけておられる。そうして、この訣別に際しての祈の中で、「父よ」を六回叫んでおられる。実際はもつと多かつたであろう。そのようにイエスは、神を父なる神、父神として、深く把握し信頼し拝し、かつ父と一つになっておられた。子たるの霊に在って。

イエスはこの「主の祈」において、「我らの」という語をもつて祈るべきことを教えておられる。この「我らの」が真に「我らの」になるためには「わが」が先行しなければならない。まず「わが父」との祈がないならば、「我らの父」にはならない。私たちが真に救贖のよろこびに入ったとき、

「汝はわが愛^{いとく}しむ子なり、われ汝を悦ぶ。」 (マルコ1:11)

との言を、イエスの受洗のときの神の言を、私たちの個性の実存的な意味において、恩寵の言として聞いたのである。即ち私たちは、神から「汝」と呼ばれて、はじめて、「われ」



を自覚した。決して「われ思う、故にわれ在り」ではなく、ルカ伝第15章の「迷える羊」の如く「父に呼ばれ尋ねられる」ことにより、また同章の「放蕩息子」の如く、父に罪をおかしたと知って「父のみもとに還りゆく」ことによつて「在る」というあの自覚である。しかもそのように「父よ」と呼び得るためには、即ち私たちが子としての「われ」の自覚に来るためには、神の御霊に導かれることを要したのである(ロマ8・14)。そのように「子とせられたる者の霊を受けた」ことによつて、「我らはアバ父よと呼ぶ」ことができたのである(ロマ8・15、ガラテヤ4・6)。

しかもそのような「御霊」を受けることは、キリストの十字架の贖罪の恩恵に浴することなくして、罪よりの完全なる解放なくして、どうしてあり得ようか。御霊を私たちが告白するときは、必然的に、十字架の恩恵の下でいわれているのであることを、明言して置かねばならない。ここで私が聖霊を強調するのは、特に歴史的な使命と意味を感じるからである。しかし私は聖霊を強調するとも、決してこの十字架の恩恵の場をはずしていつているのではない。パウロがみ霊のことをあれほど強調しているのも、十字架の下であり、この千歳の磐の上に立つてであつた。私もまたその点でまったくパウロ的であらんと欲する。どうかこのことを誤解しないようにしていただきたい。そのわけは、福音書におけるみ霊は、自然的・一元的な霊とは異なるところの、キリストが十字架を経て復活した後、父に請うて我らのためにつかわしたもうた「キリストの霊」であるからである。

「イエス未だ栄光を受け給わざれば、御霊いまだ(人々に)降らざりしなり。」(ヨハ

ネ7・39)

とある如く、十字架による罪の贖いぬきのキリストの霊は我らに何の関わりもない。ペンテコステはそのようにして来たのである(使徒行伝1～2章参照)。十字架と復活の恩恵と生命の光の下でこそ、聖霊は強調されねばならない。

かくて私は、「わが父」と懼れなく親しく信賴して呼び奉る。この父の愛、即ちキリストにあらわれし贖罪の愛にゆるされ、潔められ、燃やされて、父を愛しまつる告白となる。父とキリストの愛が私の心臓を貫き、聖愛の火を点じ給うた。かくてこの愛の火が、キリストへの、父への、愛の叫びとなつて「お父様!」と叫ばしめる。その様な「わが父」を同じく恩恵として経験した兄弟姉妹たちの、あるときは聖名にあつて相集まりし二、三人の集まり(本質的にこれが聖霊の幕屋である)、あるときは形成された集会(幕屋)、ある時はいくつかの教会(幕屋)、ある時はキリストの体としての全世界のエクレシヤ(キリストの幕屋)、ある時はそれが歴史的な時間的な連なりもふくめたエクレシヤを、「我ら」として告白する。「我ら」の内容は、その時そのおりの祈の現実において、いつわりなき「我ら」の内容を盛るまでである。しかし「父」と告白される限り、この「我ら」が全人類という様な角度になることはむずかしい。あがなわれない者たちにとっては、神を「父」と呼ぶことはできないからである。「父」を知らざる「父」の子らたる「彼ら」のためにこそ、「我ら」はこの「父」



を告白しなければならないのである。

その「我らの父」は「天に在います」父である。天とは、何処か。この自然的相対界における自然科学的「天」ではない。なるほど我らの実感の方向は、キリストが大胆になさったように上を仰ぐ角度である。しかし、この「天」(原語は「諸天」)は、空間的意識を媒介とした霊界の天という角度である。だから祈のときは、人はおのずから瞑目めいもくするのであり、たとい目を開いていても、それは霊界の天を見ているのである。「霊界の天に在います我らの父」、ここに父なる神が父神ふしんであり、同時に霊神れいしんである自覚があり、キリストは神を「父神、霊神」(ヨハネ4・23、24)として不可離に把握しておられたのである。私たちはこのキリストが父とし、このキリストが霊として拝された神を拝するのであって、決して直接的に、私が神を父とし霊として拝し得るのではないことは、さきにも述べた通りである。「父」は我らにとってキリストを通さねば父でなく(ヨハネ14・6)、「霊」は我らにとって、同じくキリストを通さねば「み霊たま」(ロマ8・9)ではないからである。

かくて「在天の我らの父よ!」と呼び奉るとき、何と一切をたち越えて「我らの霊」(ロマ8・16)は神のふところに抱かれ、霊的実存共同体(幕屋、エクレシヤ)の意識の下にみ霊の世界に突入することであるか。しかもそれは、断じて自然的・一元的霊の世界の消息ではない。また私はそのような危険を感じない。まことにイエスが「主の祈」の劈頭に「父よ!」と呼びかけられたこの一語に、救贖の全内容が、渾然とふくまれているからである。

●二 聖名讃仰

「汝の**み名**が聖としてあがめられんことを」(マタイ6:9下)

大切なことは、

「汝の**み聖**なり」(黙15・4)

であって、我らの拝する神の御名みなが「聖」であるという自覚である。諸霊がある。しかし、我らの父なる神の**み名**は「聖きよ」い。この「聖」に対して我らは「罪」「けがれ」として徹底的に別かたれ、自覚されねばならない。神において、名は同時に実を示す。神は虚名の存在ではなく、実名じつめいの実存であるから。そのように名に全実存がこめられている「名」は神のほかにはない。神が神として、聖者(イザヤ40・25)として、あがめられることは極めて重要である。神の「聖」が顕然として立つていない信仰はエロスのなしたしみとして、神に對する冒瀆となる。「父よ」としたしみ呼ぶとき、それが厳かなしたしみとして、「聖きよ」き神が立っているためには、聖霊が我らに内住していることを要する。「聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉」という三唱を以てするイザヤ書6章、黙示録4章の聖名の讃美は、この罪の世を救う神が、何よりも聖なる神であって、断じて魔力的な神々、諸霊(デーモーン)とは質的に異なることを顕揚するものである。

その聖なる者、至高者が、低く「僕しもべ」の相において天降りして、人間の罪のどん底に立ち、



救贖をもたらし給うたのである。このことは、イザヤ書53章を中心とした「エホバの僕の歌」や43・3、43・14、48・17等の聖句に、聖者と贖主とが同一の神の二面としていわれている。また第三イザヤの57章15節、63章、64章等に預言され、啓示されている如くである。聖なる神が、その聖を贖罪の恩恵を通して与え給うところに「汝の名」の実がこもっている。

「汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて汝らの智慧と義と聖と救贖とになり給えり。」(コリント前1:30)

とある如く、我らの聖者は即ち贖主である。第二イザヤ、第三イザヤにおいて、そのことが最もあきらかに啓示され預言されていたことは、驚くべきことである。それ故に、神の啓示は旧新約を貫いて救贖をもたらす「聖」の性格を一步もはずれないのである。それ故にあがなわれたる者は聖霊をやどす「聖徒」であり、「神の宮」(コリント前3:16)であり、「聖霊の宮」(コリント前6:19)である。かくて「汝のみ名が聖として崇められんことを」「ハギアスセート」を単に「崇められんことを」と訳したのでは本質をつかない、ルッターの"Dein Name werde geheiligt"英訳の"Hallowed be thy name"は原意をしつかりとらえている。

かくて一切は、この神の聖名のゆえにあり、聖名のためにある。そして私たちにとり、神の聖名は「父」というのであり、しかもこの「父」の聖名は「キリスト・イエス」の「聖名によって」呼ばれるのである。私たちが「祈」において、最後に「キリストの聖名により」ととなえるとき、それは単なる附言では断じてない。祈るとき、このキリストの「聖名」を抜きにしては、直接性的となり、それではキリストが「われは門なり」と言われ、「我によらでは父のもとに到り得る者なし」と言われた道はずれることであり、門より入らないことであつて、そのような祈はまちがいである。しかし、問題はどこまでもことばの表面のことではなく、ことばがことば以前のみ霊に支配されて発せられているかどうかにある。

「儀文は殺し、霊は活かす」(コリント後3:6)

「神の国は言になく力にある」(コリント前4:20)

とパウロが言う通りである。祈においては、言が、^{ことば}はらわたの底までみ霊に貫かれることを要する。

以上の様な意味で、「汝のみ名」が真に「聖としてあがめられ」ることが決して言の祈において真であるばかりでなく、それよりも根本的には実存を以て神が「聖」としてあがめられていることが大切である。この「主の祈」の内容そのものが、むしろ根源的にそれをこそ示して居られると思う。換言すればこの祈は

「我らの実存を以て汝のみ名を聖として証示すべく生き得ますように」

ということである。私はよく「実存」と言う。それは殆ど二十年前から「現実」という語と共にどれほど用いて来たか知れないが、その方向と性格は今も変わっていない。いよいよ霊的にかつ終末的に深められつつあるのをおぼえるばかりである。決してこの「実存」



が人間の側、私の側において、単なる倫理性において、いわゆるような実存ではない。まったくキリストによるところの、キリストが自らみ霊を以てこのダメな罪びとにおいて実存してくださる実存をいうのである。そのことは、私の最初の論文「別の路」が既に決定的に告白した角度であり質である。そのような実存を乞いねがうところに「汝のみ名があらめられる」内実がある。

聖なる栄光が聖名に帰せられて、「我」はそこにはない。「ない」とは形而上学的に「無」というのではなく、「我」が実存的に否定しつくされているのである。ああこの死的否定の中に歓び讃える聖名の讃美よ。福音における生死の論理は最も深い倫理性を有つ。それは福音における倫理性は、絶対に終末論的、性格のものであつて、「有」とか「無」とかの形而上学的範疇と異なり、生か死かの死活問題に関わる。このことはパウロの全ロマ書を見れば、あまりにもあきらかである。しかもその倫理性たるや、まったくキリスト論的であつて、聖霊の問題と切りはなして考えることはできない。ロマ書の前半、即ち第8章までの大文字は、その間の消息をつたえて余すなき永遠の大文字である。

しかしながら、福音は深く倫理を有ちつつ倫理をもつて我らをしばらない。終末的倫理に生かしめる力である。そこにこそ聖なる霊の現実がある。ヨハネもパウロも、それをキリストの生命の現実とした。彼らは恩恵の力の下にあつて生きた。その様な実存を与えられつつ、彼らは聖名を讃えたのである。しかも聖なるみ名の「聖」は、同時に「贖」であることは、既に述べた通りである。

●三 聖国来臨

「汝のみ国が来らんことを」(マタイ6・10上)

「み国」は「王国」とか「支配」とかいう語である。「汝」が一切の君主として君臨し、支配統御し給う国の到来を、との祈である。イエスの伝道の第一声はガリラヤ湖畔における

「時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ。」(マルコ1・15)

であつた(マタイ4・17では「天国」)。福音とは、イエスにとり、神の国、天国、み国の嘉きおとずれである。そして、イエスこそはみ国の告知者であり、体現者であり給う。み国を待望する現実の終末的倫理は、あの山上の垂訓に(マタイ5・3～7・27) あきらかに示された。この「主の祈」はいわばその垂訓の心臓である。イエスはこの終末的倫理を自ら実存し、神の国のおとずれをあの数多きたとえ話をもつて、観念的ではなく、具体的に受肉的に暗示し、象徴し、神の国における永遠の生命の相を徴として実証し、また保証したもうた。

「我もし神の霊によりて悪鬼を逐出さば、神の国は既に汝らに到れるなり」(マタイ

12・28)

「我もし神の指によりて悪鬼を逐出さば、神の国は既に汝らに到れるなり」(ルカ

11・20)



「盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦えらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。およそ我につまずかぬ者は幸福なり。」(マタイ11・5～6)

彼の一切の大能のわざ、神癒のわざは、神の聖旨、聖愛の発露であつた。それは神の栄光のあらわれとして、終末的性格のものであつて、断じて現世的御利益的な霊力ではない。これにつまずいたのが、おのれを義とする祭司、学者、パリサイの徒輩であつた。キリストは、霊肉一体としての全人の救を、み国において、新天新地到来のあかつきにおいて、約束し給う。同時にその実存は、地上において、我らの霊のためには倫理という語ではつつみきれない高次のいのちの霊言をもつて、我らの肉体のためには、その聖なるあわれみの霊力をもつて、み国と同質のものを示し給うた。

「活かすものは霊なり、わが汝らに語りし言は霊なり、生命なり。」(ヨハネ6・63)である。

「わが言をききて我を遣わし給いし者を信する人は、永遠の生命をもちかつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。」(ヨハネ5・24)

ヨハネ伝によれば「み国」はかかる「永遠の生命」の現実性において示されている。

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は、死ぬとも生きん。およそ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。」(ヨハネ11・25～26)

の如き聖言は、ラザロの復活という大能のあらわれの際に発せられた。キリストの言動は根源的なそのような終末の聖国の角度から語られ、かつ行ぜられていた。

「終末」ということも、私が以前から「実存」や「現実」と共に、私の神学的把握の基礎的概念として強調して来たことなのである(註3)。キリスト論的終末論的な私の信仰告白に、聖霊の恩寵と自覚が顕然として来たことによつて、いよいよその真なることがあきらかとなり何の不安もなく私は進みつつある。人間のことは、おりにふれ、時に応じてある面を強調することがある。それは、個人の場合も社会の場合も、その歴史的現実在即して描かしめられるカーブである。かかるカーブは、歴史の中に実存する者が、必然的に描かせられるものであつて、この描きなくしてはかえつてその「十字架」も、その「復活」も、その「再臨」も、その「信仰のみ」も、観念化する危機にさらされる。それはルッターの言つた通りお題目のようになつた「主の祈」が、十字架にかけられてしまうのと同然である。不安なく私がかく告白できるのは、私の智慧にも力にも実存にもよるのではない。ただキリストの智慧と力と実存が、み霊の現実において、私をそのように弾力性あるものにして、キリストという北極に向けさせてくださるからである。私は聖霊のバプテスマを受けて以来、いわば磁性を帯びた鉄片である。霊界の大磁極たるキリストに吸いつけられる。その霊的磁極を指さざるを得ない。同時にこの鉄片は、これに近よる魂にキリストの磁性を頒たずには居られぬ悲願を有っている。このキリストという北極十字星の光は、現実の力であり、



み霊の光であり、また愛の力であるから、暴風雨にも吹雪にも、わが乗る舟のへさきの方
向に光っていただく。これはまったく聖霊の現実においてのみ言われ得ることなので
ある。

「それ神の国は飲食にあらず、義と平和と聖霊によれる歡喜とに在るなり。」(ロマ
14・17)

とか、

「神の国は言にあらず、能力にあればなり。」(コリント前4・20)

とか言われているように、「み国」を祈る現実には、み国的な現実には我らが現に在るそのよう
な場においてこそ、真に待望されるのである。このことは、次の祈の句と共にあきらかと
なる。そのみ国の住民は即ち山上の垂訓に「恵福なるかな」とキリストに言われている如
き人々である。何らかの意味で真に十字架を負っている人である。また十字架を真に負う
人々は、十字架の下について倒れる人々である。負いきれぬ十字架を負うて倒れた人々が、
み国に最もふさわしき人々であるに相違ない。旧約の預言者たち、新約のステパノをはじめ
とする無数の有名無名の殉教者たちによつて、み国の土台は築かれている。

言うまでもなく、「隅の首石」はキリストである。み国がはらわたの底から待望されない
ならば、それは、キリストの十字架の真義が身に烙印されて居らず、キリストの祈の呻き
を知らないからである。ロマ書8・18～26のあたりは、そのような深い待望の祈である。

「御霊も我らの弱きを助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、み霊
みずから言い難き呻きをもとりなし給う。」(ロマ8・26)

とある。ヨハネの黙示録はみ国の待望の大詩篇である。

「御霊も新婦(エクレシヤ)も言う、来たりたまえ」(黙示録22・17)

に對して

「然り、我れ速やかに到らん」(黙示録22・20)

とのキリストの再臨の御約束がある。その「速やかに」が延びているのには、神の側に深
刻なわけがあるのであろう。我らは知らない。ただ知っているのは、最後の審判の時期が
のびているということ。そして、のびているだけそれだけ、この世界はいよいよ深刻な審
判をまねかねばならないということである。

終末性は歴史と共に深刻化してゆく。それは私たちの実存が、主にあつて責任を同時に
深く負わされているからである。「み国を来たらせ給え」との祈は、それほど終末的責任を
負わされた十字架の信徒たちの実存的な祈なのである。

